
桜坂高校帰宅部

石崎京悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜坂高校帰宅部

【Zコード】

N7325A

【作者名】

石崎京悟

【あらすじ】

卒業を控えた相葉は、振り返った。自分が過ごしてきた二年間を。ケンイチとの出会い、別れ。二人の出会いから始まり、帰宅部はさまざまな人間模様を織り成していく。

相葉洋子 一年（前書き）

帰宅部シリーズ第一弾、帰宅部の女帝「相葉」を描いた三部作。
第一作目。

いつだつたかの話

木造の天井。電気は消えていて、埃っぽい木目は見えない。窓を見ても暗く、近くの公園で咲いていたはずの桜は不気味な影になつており、私は目を逸らしていた。敷かれた布団は暖かく、切ない。私一人ではないから。

ふと顔を横に向けると、隣の男はまた布団からはみ出している。寝相ではない、起きているのは分かつている。
避けているのだ 私を。

何で……？

「ねえ……」

私は横にいる彼の名を呼んだ。
続けて、聞いた。

訴えに近かつたかもしぬれない。

どうして何もしないの？

私が汚いから？

「違う。そんな事は、言わないでくれ」
違うのなら、何故？

いいじゃないの、抱けば。
私は好きよ。

何故拒むの？

触れられない？

どうして触れられないの？

黙らないでよ。

初めてつてワケじやないんでしょう？ 私知ってるんだから。

せめて……答えてよ。

「

……え？

聞こえないわ。

「

そんなの、そんなの今更になつて……。

卒業式前日。

私は相葉、桜坂高校三年生。後輩に姉ちゃんと慕われ、同学年には『ケンイチの恐ろしい彼女』と退かれている。

ケンイチの彼女、周りはそう言つ。否定するのはややこしく、複雑な感情が絡み合つていて、誰かに説明をするのは面倒くさいし、私にはその事を話すだけで胸が痛くなるから嫌なのだ。多分、ケンイチもそうだろ？

だから私は誰にも、何も言わない。

これから語るのは私ではない。

何の因果か、わざわざ卒業式前日に映し出される、私の夢なのだ

から。

三年前 春

高校の入学式、初めてのホームルーム。まだ名も知らない皆が緊張を隠せない中、私の前に座っている男子は急に振り返り、「ケンイチって言うんだ。よろしく」堂々と話しかけた。男子の笑顔は、ちつとも固まってない、至つて自然な笑顔だった。

「え？ あ、ああ……よ、よろしく」

私にとつてそれは意外でつい、じどうもどろになる。

ケンイチは私の返事を聞くと子供のような声色を出し、「あくしゅあくしゅ」

その奇妙な「//」二ケーションの取り方に、「は、はあ……」

戸惑いながらも求められた握手に答えた。

「こら、石田」

こつんつと、先生に叩かれた。大して痛いはずでもないのに、ケンイチは大袈裟に顔を歪めた。それはとても滑稽で、私は吹き出しがけてうつむいた。

「痛いッスよ、先生。何も入学早々、新入生を小突かなくてもいいじゃないですか」

唇を尖らせて抗議する。先生は笑い、

「お前が初日から遅刻しないような生徒なら、俺も注意だけで済ますぞ」

指摘する。ケンイチは苦笑いになつて、

「ごもっともです」

仰々しくふざけて返事した。

「馬鹿」

先生も呆れて、それだけ言い放つて教壇に戻った。ケンイチは先生が背を向けている僅かな間を見逃さず、じらりと見て、「怒られちゃった」

痛そうな顔で叩かれた部分をさすり、舌を出しておどけて見せた。私は『屈託のないケンイチ』に好感を持つ。

「付き合つてくれないか?」

ケンイチが言つてきたのは一週間もしない、電話口での会話の中だった。

ケンイチと話すのは楽しい。

普段話しているだけでも、些細なことで口ゲンカになつても、結局笑い事にしてしまう。私がその事で本気で怒ついていた。まるで私を昔から知つてゐるかのよつこ。 知らなかつた。

男の子と付き合つのがこんなに楽しいなんて。

私が中学生の頃に嫌われ者だつたせいもある。

(理由は今でも思い当たらない。いずれ誰かに回つてくるそれが、たまたま私だつたのだろうと今は納得している……させている)

そのせいで日常における全てに嫌気がして、早くこんな所から出ていきたいと、ずっと進学を夢見てきた。新しい境地で全てをリセットし、高校でやり直したかった。

今、私の隣にケンイチがいる。『嫌われ者』と扱われた私を『好きだ』と慕うケンイチ。

私は彼が『好き』なのか知らない。私の中にあるケンイチへの感情、これをその言葉に当てはめるべきだろうか?

私は言われ慣れていない言葉を耳にし、それに照れているだけではないのか?

『好き』ではなく、私を慕ってくれて『嬉しい』だけじゃないの？

そこがハッキリしないと、ケンイチとは付き合えない。

ケンイチとこんな感情で付き合うなんて、そんな自分勝手は許せない。

ケンイチをがっかりさせたくない。彼とどう付き合うのか、ちゃんと決着が付くまで私は答えない。

ケンイチには、伝えてある。

「考え方」

彼は過ぎて行く日常で、ただ、私の答えを待つている。でも、少し不思議。ケンイチは何にも変わらない。だから、私はつい尋ねる。

「答えを待つって、辛くない？」

私は貴方を待たせているのが辛い。もう考えたくない位にまで考えた。それでも、苦痛を伴いながら考えて。それは私が貴方をいい加減に思っていない証拠。

ケンイチは沈黙して、しばらくしてから答えた。

「相葉が長い時間考えてくれるのは、それだけ俺のことを考える証拠だろ。それって嬉しい事だと思つよ。だから、しばらくは待つよ」

……同じ考え方。

「辛いかつて聞かれたら、辛いかな。だから、待ち疲れてどうにかなる前に答えてよ。もし相葉が『付き合う』って言つてくれても、本人が壊れちゃね」

私はケンイチのこいついう点で驚く。眞面目な話で、軽くふざけられる人間なんか、私の周りにいない。ケンイチはホントに私と同じ高一なんだろうか。

彼は大人だ。私なんかよりずっと……だから私は考えるんだ。彼と対等に付き合うために。

週末はいつもデートだ。遊園地に映画館、カラオケとボウリング、二人だけなのにとっても楽しい。

お互いの家にも行った。ケンイチは女の子の家に入るのが初めてだったらしく、私の家では凄く緊張して、居る間中ずっと正座になつて、足が紫色になつてもがんばった。私はずっと崩してもいいと心配していたが、最後には、

「あはははは！」

ケンイチがしごれた足を相手に悪戯苦闘するのがおかしく、指を指して笑った。

逆に私がケンイチの家に行くと、お母さんは普通の対応だったが、弟が問題だつた。ケンイチの話では、私は弟に似ているらしい。女の私を男と被らせるのはどうかと思う。まあ、ケンイチらしいと言えばそうだけど……。

「ただいまー」

弟は何処かに出かけていたらしく、私がケンイチの部屋で一段落して彼と雑談をし始めた時に帰ってきた。

弟の部屋はケンイチの部屋を横断しなければ入れないようになっていて、私は嫌でも顔を会わすことになる。

どんな弟かな……？

期待と不安を巡らし、弟が戸を開けるのを待つた。

廊下から近づいてくる足音、ケンイチの部屋の戸が開かれて、兄とは全然似つかない童顔が現れた。

あんまり似てないので、私は言葉を失つてしまつた。

ケンイチの弟はケンイチとは三つ違いで中学生になつたばかり。

それで幼く見えたとしても、私にはまだ小学生でさらに低学年の頃が、体だけ大きくなつたようなアンバランスのせいで、何も知らない純粹そうな印象を受けた。生き字引のようなケンイチとはまるつ

きり正反対である。

兄弟だから似てないとおかしいといつ訳ではない、そういうのもういる。

ただ、あんまりにも違うんで、

「お邪魔します……」

私は変に緊張してしまい、余所余所しく挨拶する。ケンイチの弟はしばし私を見つめて、逃げた。

階段を駆け上がり、乱暴にドアを閉める音がした。

「おお？ ヤツめ、俺の想像以上の反応を！」

大笑いするケンイチに、

「喜んでないで、私はどうしたらいいのよ！」

困惑する私。

それからも弟は物陰からこちらの様子を窺つたり、ケンイチの部屋を通る度に駆け足になつたり、まるで初めて見た生き物に対してするような反応を見せていた。

ケンイチも弟の異様な反応に笑つていられなくなり、

「彼女連れてきたのがそんなに珍しかったかなあ……？」

普段でも弟は無愛想で人見知りが激しい。だが、とても優しい弟で今日は変に緊張しているだけなのだと、私に懸命にフォローしていた。こんなに焦つたケンイチは初めて見た。

ケンイチの家は面白かったんだけど……弟が……。

それよりケンイチっておかしい。同じ高校一年生なのに、会話の内容は大人っぽい。それなのに、現れる表情は子供のようどころかに変わる。

やはり私はそんなケンイチが好きなのだろう。

放課後。図書館に用事があつた私は衝撃を受ける。ケンイチが本を読んでいたのだ。

今までに見たこともない表情。とても穏やかで彼の周りにある空間が止まっているかのような。ただ目だけが懸命に字を追っている。砂地が水を吸うように、彼の目が字を読み取っている風に見えた。でも、彼は砂地が泥に変わるほど、同じページを読み、次のページを捲るまで時間を掛けていた。

読むのが遅いはずはない。ケンイチはよく図書館に入り浸り、文庫程度の本は昼休み中に読みきつてしまつ。そしてその日の放課後に、その内容を嬉々として話すのだ。

私はそのいつもと違う読書法を、静かな表情で懸命に読む彼の姿と、その空間独特の雰囲気をじつと見入っていた。

チャイムが鳴る。

彼は天井を仰いでチャイムの音を確認した。時計を見ながら席を立つ。本を戻しに何処かへと消え、また別の本を持ってきてその本に付録された貸出力カードに記入し終えると、私の方へとやって来る。「待つた？」

驚いた。

……私って、何度ケンイチに驚かされているんだろう？

「知つてたの？」

私はそのままの感想を口に出す。だって、こちらを見たような節はなかつたし。

彼は微笑んで、

「うん」

「そんな素振りは無かつたよ」

「図書館に近づく足音と、扉の開け方で解つた。相葉のそれは覚えてるから」

そんなんで判別できるんだ……。ちょっと怖い氣もするけど、嬉しいような……でもやっぱり変かな……？

ん……待つて。

「知つてて、今までほつといたの？」

訊くとケンイチは苦い顔をして、

「実は入つてからじうしたのかが、よく分からなかつたんだ。そのまま近づいてくれば声を掛けようと思つてたし、まさかドアを開けたままじつとしてるとは思わなかつたんで、オレを確認してどつかに行つたかとばかり思つてたんだよ」

「じゃ、確認してくれてもいいじゃない？」

いつにもなく食い下がる私。私と解つてたのなら、本なんか読まず見つけてほしかつた。

「私があそこでじつとしていたのは、あなたを見ていただけじゃないのよ。ケンイチが止まつているような空間を破つて、私の事に気付いてほしかつた。本を閉じて私の元へ来て欲しかつたのよー」「

なんで、こんなに怒鳴つているんだろう。なんでこんなに感情が吹き出すんだろう。

本に嫉妬？　いや、違う。私の知つてるケンイチがあの時に消えていたのが、彼のまた新しい部分を発見して自分が離されていることを実感したのが嫌なんだ。

「解らないからつてほつとかないでよ！」

嫌だ。こんな黒い気持ち……ケンイチの前でこんな……こんなハつ当たりのような子供っぽい気持ちをぶつけるのは嫌だ！

「相葉？」

ケンイチの声を振り切つて走る。下駄箱へ。

何で？

走る、外へ。

何故私は出でいくの？

訳の分からなこまま飛び出せつと、

「！」

ギュウッと腕が捕まつた。駆け出さうとした足が勢い余つて、倒れそうになる。

背中を優しく支える手。

「待つてよ！」

ケンイチは怯えてこりみづて瞳が揺れていて、それでいて優しい顔だった。

いつかケンイチが言つた言葉を思い出す。

『オレは甘いんだ。優しくは無いと思う。例え家族が、相葉が盗みを働いても、オレを刺しても許すだろう。それは優しさじゃない。優しさは厳しさが一緒じゃなきや、そつじやない……』

思い出した言葉を呟く私に、ケンイチは辛そうな顔をする。ケンイチはもう、何が言いたいか分かつている。

「ごめんよ」

胸が熱くなつた。

「私は変なことを言つて逃げたのよ？ なんで優しい顔で捕まるの？ なんですぐに責めないの？ 付き合つのがケンイチと初めてでも、これ位のことは分かる……」

顔も熱い。何もかもが熱くなつっていく。

「私の心は変わつた！ ケンイチは変わらない！ 何故なの！？」

涙が溢れる。熱くなつた顔を冷まそうとしているはずなのに、その流れしていく軌跡はもっと熱くなつていて。

「私にとってケンイチは私の心をどんどん変えるほどの中存在よ……ケンイチにとっての私は何なの……？」

うつむきそうになる。でも、ちゃんとケンイチの顔を見て言わなきや、最後まで。

「私はあなたと対等に付き合いたいの……だからあなたにも変わつて欲しいの、好きだから……好きだから対等でいたいの！……」

私の叫びはケンイチの顔を曇らせ、去つていく私は、彼の心に傷

を残しただけだった。

そして。

ケンイチは笑わなくなっていた。私が奪つたからだ。
必ず見かけるのは放課後の図書室。空間はもう止まつてない。彼
は普通に読むようになつた。彼の不思議な読書も、空間を止める力
も、私が奪つた。

毎日の授業の合間に図書館と図書館の裏をチェックする。知らな
い人は必ずいて、ケンイチは必ずいなかつた。

教室でも、彼はいなかつた。本人は先生が来るまで教室におらず、
何か避けられているようだつた。

別れの言葉を言われるつもりだつた。でも、自分から訊くことも
できず、ただ、待つた。

私とケンイチは終わらないまま、時が過ぎる。

冬

年が明けた。誕生日を過ぎても、中間テストを受けても、期末テ
ストを受けても、去年を思い出すのはケンイチと一緒にいた時間だ
け。

私が逃げて、今はケンイチが逃げて、二人は終わつたんだ。
何もかもが幻のように思える。でも、ケンイチとの幻を消したの
は、私なのだろつ。

今はただ、時間が過ぎていくのを見つめることしかできない。

ほんとはね、しってたの。

けんいちはけんいちなりに、わたしをあいしてくれたこと。

でもね。

わたしにまだけんいのとせなじぶんだけのあい。
もてなかつた。

けんいちもてせぐりだつたんだよね？

わたしとねなじよにふかいやみをかんじていた。

相葉洋子 一年(後書き)

えー、青春物書を石崎京悟でいわせます。
ご意見・ご質問・ご要望などは、贅否かわらすありがたく頂戴したいので、どしどしあお寄せください。

相葉洋子 一(前書き)

帰宅部シリーズ第一弾、帰宅部の女帝「相葉」を描いた三部作。
第一作目。

春

やつかいな事が起きた。

「姉ちゃん姉ちゃん！」

新しく入ってきた一年生。その娘の名前は愛美。私は普通に図書委員の仕事をこなし、普通にそこでの雑談に応じていただけだったのだが、どうやらなつかれてしまつたようだ。

迷惑な話だ。私は後輩に親しまれるほどの人間じゃないし、ケンイチとクラスが変わつた今でさえ、彼とは顔を会わせるだけで辛いような、自分のことで精一杯の女なのに。

後日、さりにやつかいな事が起きた。

「付き合つてください」

新入生の男子から告白された。しかも、昼休みの図書館で。図書館中の人間から注目が集まる。正直、恥ずかしい。

受けけるも受けないも、私は恥ずかしさで閉口し、考えられなかつた。

「姉ちゃんはまだ彼氏がいるんだから、駄目よ」

愛美が横から口を挟んだ。内容はともかく、助かった。冷静に対処できる。

一呼吸おいて、私からも断つとする。

「やつぱりそうなんですね。石田さんなんですね」

向こうからもケンイチの名前が出た。言つなり、図書館を出て行つた。

「どうなつてゐるの……？」

疑問が頭を巡つてると、注目も去り、図書館のざわつきは消えた。消え際に周囲から、「やつぱり」とこつ声を残して。

「愛美、どうなつてゐるの？」

「どうなってるのって、石田先輩って姉ちゃんのカレシでしょ？」

否定も肯定もできない。厳密に言えば、別れてないが付き合つて

もない。どちらも意味が同じだ。

「で、本当のところどうなんですか？」

「何が？」

愛美が意気揚々と尋ねてくる。まったく見当が付かない。

「やっぱり石田先輩が浮氣したんですか？」

「は？」

「あ、じゃあ姉ちゃんなんだ」

待つて待つて。

私はあわてて、図書室に愛美を連れ込んだ。あの場で問いただしてもいいが、図書館中の人間が本を読むフリをして、聞き耳を立てていたのが分かった。皆、不自然に体が傾いている。

「誰から聞いたの？」

念のために、愛美の耳元で囁いた。愛美もそれに応じる。

「噂になつてますよ。石田先輩つて一年の女子の間で評判になつてから、付き合つてるかどうか気になるんですよ」

それで、私の名前が出たのは分かる。でも、それだけじゃ浮気に行き着かない。

「それで浮氣つて？」

「はつきり言って、一人が一緒にいたことないじゃないですか。外では知りませんけど」

学外でも、付き合いはないのだけれど。こういう話になると、本当にもう付き合つてないことを実感する。そして、別れてないと心の奥から声がする。なんとも言えない痛みが走り、気が滅入る。

「それでどっちかが浮氣してるって話？」

「はい。石田先輩つてプレイボーイじゃないですか。だから、石田先輩の浮氣説が強いんですけど」

「ふれいぼーい……ねえ。

「ケンイチが？」

「え、だつて、他の男子と違つて、メチャメチャ女の子と話しますよ？ 軽くセクハラ発言しますけど、優しいし。何より女性の名前を忘れないから、知り合つた人にはちゃんと声かけてくれるんですよ」

確かに、ケンイチは女性の名前を覚えるのは早かつた。一年の時に、クラスの女子の名前を一週間で覚えたし、一ヶ月で全学年の名前を覚えていた。そのくせ男の名前は覚えが悪く、人気のある男子に半年経つても名前を聞いていた。

今、思い出せばそれも単なるネタだった氣もある。ケンイチが間もない頃に、クラスの男子を呼んでいたのを覚えている。正直に言って、影の薄い男子で私は覚えてもいなかつた。（私は男女関係なく、一ヶ月もすればクラスメイトの名前ぐらい覚えられる。普通の方だと思う）

去年と同じことをやれば、今年はそういう評価になるのか。来年もきっと同じことになるのだろうか。

それはともかく、

「で、どうなんですか？」

この噂話好きそうな後輩をどう処理するか、困った。

そういえばケンイチは変わつた。

一年生になつてからというのも、欠席が多くなつていた。彼が優等生だったという事もあり、その豹変ぶりに先生達は慌ててケンイチを生徒指導室に何度も呼びだしていた。だが、一向に治る気配はない。私から見ると、彼の何かが吹つ切れたんだと思う。それが何かはつきりと分からぬが、原因は明らかに私だらう。それには何の感慨も無い。私はそれが私の罪だと受け入れてしまった。そしてそれが償いよりも無いことを。

図書委員は真面目にやればやるほど忙しい。今日も私は放課後になると、図書館に行って蔵書整理と生徒の本の貸し出しや返却のチ

エック。愛美も無駄口叩かずに、せつせと働いている。

プリントの「コピー」が必要で、職員室へ向かった。途中で男子に出会った。

「この前はすいませんでした」

立ちはだかるように廊下の真ん中に立ち、頭を下げてきた。ちょっと急ぐんだけどな。

「いいのよ、別に」

「お話し兄さん……石田先輩から聞きました」

ケンイチは私の兄じゃないけど。この子にとつて、兄さんなのかな。っていうか、いつの間にそんな中になってるの。

「オレはそんなつもりじゃなかつたんです。あの時は、もし兄さんが浮気してたなら、そんな人よりオレと付き合つた方がいいと思つて……」

何かまた新しい話ができる気がする。しかも、吹聴したのが誰なのか明らかに分かる。

「本当にすいませんでした。オレは……本当に力になれないけど、お一人が幸せになることを祈つてます」

黙つていると、そのまま話を完結させて行つてしまつた。あ、コピーに行かなきや。

「コピーを済ませ、図書館に戻る。今度は誰に会つ」ともなぞうだ。

ガラス越しの景色を見ながら、来た道を戻る。体育館につながる渡り廊下が見える。体育館の入り口手前の階段に座つている男子が見える。ケンイチだ。

ケンイチがぼーっと座つている。

いい加減、何か話してもいいよね……むつきの子の話もあるし。

図書館に「コピー」を置くと、愛美に後の仕事をまかせた。不満を口にしたが、無視した。

ケンイチの背後に付けるよう向かうため、校舎内を大きく回つて体育館の裏側に出る。

遠回りになつたが、ケンイチはまだそこにいた。

鞄を後ろからぶつける。

「何ボケツとしてんのよ?」

何も違和感無く、（こ）一ゆ一考え方で話しかける事態、違和感があるんだけど）親しげに話しかけた。

しかし、返事はなく、ケンイチは後頭部に手を当てて震えている。
……あ。

そういえば、鞄の中にはハードカバーの本が三冊と、分厚い教科書類がぎっしり詰まっていた。

「ごめーん！ 悪気はなかつたのよ？ ね？ ね？ 大丈夫？」

私は懸命にさする。すると、今度は階段でバランスを崩し、ぶち。髪の毛を引っこ抜いてしまった。

「…………！」

ケンイチの表情は私の方からは見えないが、思いつきり静止している。きっと今、ものすごい顔をしてるに違いない。

私は取り乱しながらも心配して尋ねる。

「ほ、ホントに大丈夫？」

「ああ、大丈夫……」

ケンイチは平然と答えた。何か瞳に青いモノが見えるが……大丈夫そうだ。

「…………で、どうした？ そっちから話しかけてくるなんざ、珍しいじゃねえか？」
驚いてしまつた。

用件を聞いてきたケンイチは、私の知ってるケンイチとは違つていた。例えるなら触つても痛みを感じないほどに厚く形成された瘡蓋。その傷を気付かないフリをしている感じ。

「どうした？」

同じ語句で、今度は様子を尋ねる。どうやら私はかなり呆けた顔をしたらしく。

「あ、いや、告白された男子の事で……」

「ああ……ワリィ、ちょっと嘘言つちまつた」

ケンイチの話では私は親の借金で借錢取りに付けらりれてるらしい。それで、ケンイチに迷惑がかかると考えた私は、距離を置くようにならんだ。彼は悩んだ末、私から離れることを決意した。自分がまだ高校生で、お金も無く、守つてやれるよつな力も無い。また、自分が側にいることで、巻き込まれたときの彼女の苦惱を考えてのことだつた。

さつき、私と告白してきた子の話をすると、「最初は『守る』って思卷いてたんだけだな……。『本当によく考えて、出来ると思つたんなら証明してから告白しな』って念押したお陰かな。義理堅くて頭のいいヤツでよかつた。ただの馬鹿なら通用しないからな」

微笑むケンイチ。私は納得するが、

「よくもそんな嘘を本当のように言えたわね」
データラメを信じ込ませたケンイチの口に呆れる。

「モノは言い用だからな。警察に捕まつても、口任せで逃げられる

ぜ」

得意気に豪語。

……やっぱり違つ、瘡蓋で本心が全く見えない。

「何だよ、さつきからボーッとして？ 話すのは久しづつでも、珍しい顔じやねえだろ？」

「あ……いや、随分と話してない間に言葉使いが変わつたなーつて」私はそのままの感想を言つ。中身の違いは言わない、触れられるのを拒絶してゐるかのように見えたから。

ケンイチは意外そり、

「そうか？」

聞き返すと、

「まあ、友達連中とバイトの先輩方が口悪いからな。慣れてく内にうつ感染つちまたんだろ」

今度は苦笑いして説明した。

「なんかさ、おっさん臭いわよ。まるで十年くらい話してなかつたみたい」

「……十代の人間にンな事言つなよ。ただでさえ老けてんのによ、相葉にまでンな事言われたら、傷つくじやねえか」「アンタ、そんな事で傷つくタマジヤないでしょ」「…………」

「あ、なんかマズイ事言っちゃつたかな…………？」

警戒して様子を見ると、プツと吹き出し、

「はははは……！ オマエも老けたこと言つなあ！」

「失礼ね！！」

言つて私も笑う。一人でしき頗りに笑う。そんなに笑うような話ではない。

この笑いはどうから来たモノなんだろう？

それを問いつめるのは怖ろしくて、一人でただ笑つた。

その後、二人で何を話したかは覚えていない。

きつとこれが私たちの『さよなら』。

そしてこれが私とケンイチの新しい『こんにちは』。

それから私とケンイチは再び、放課後の図書館で話すようになつた。

そうして、

「誰？」

ある日、ケンイチが連れてきた一年生。告白してきた子だ。

「ああ、茂野つて言うんだ。未だに、お前の事が……」

茂野と紹介されたその子はいきなりケンイチの口を手で塞いだ。

「んー？」

ケンイチはしかめつ面をして抗議するが、

「兄さん、それは言わない約束！」

茂野は小声で注意している。背中越しになんだか懸命なのが分かった。

「んー、ん」

ケンイチは了解したのか、何度も頷いている。茂野が納得して手を放すと、

「んでコイツがお前のことな……」

「兄さん！」

茂野が追っかけ、ケンイチが逃げる。逃げながら、「相葉のことなー！」

わざとらしく何かを云えようと大きく口を開き、「わー！ わー！」

その何かを誤魔化さうと大声で叫ぶ茂野。……むづ何が言いたいか分かるって。

しばらく走り回ると帰ってきて、

「もー、兄さん！」

茂野が泣きそうな声でケンイチを呼び、「わーった、わーった。言わねえよ」

ケンイチは茂野の意図を理解する。だが、「でな、コイツがお前……」
懲りずにまだ言つケンイチ。

「もう、いい！」

諦めて講堂を去る茂野。ケンイチは慌てることなく、私の横に座つている。

「追わなくていいの？」

私は面白がつて聞くと、

「ああ、帰つてくるよ。見てろ」
間。

「来ないね」

「あれ？」

ケンイチは不思議がつた顔で講堂出口まで様子を見に行く。する

と、

「スキあり！」

出口の横から足が出てきて、ケンイチが蹴つ飛ばされる。茂野が姿を現し、

「やーい、ひつかかつた、ひつかかつたー！ バーカ！」

倒れたケンイチにお返しとばかりに貶すと、こっちに戻つて来る。

「お久しぶりです、茂野って言います。普段は兄さんと遊んでるんですけど、相葉先輩とはまた話がしたくて、兄さんが相葉さんを紹介するつて言うんで、付いてきました」

今までのことは無かつたかのように、自己紹介してくれる。凄い子だ。……なんか意地悪したくなつちゃうなあ。

「話つて、どんな？」

私は声色を変えて、なるべく相手が戸惑いそうなイントネーションで尋ねた。

「え？ いや、その、まあ、色々とあって……」

茂野は私のそれが通用したらしく、じどりもじりひと言葉を濁し始めた。……面白い……。

「もつと詳しく述べて」

甘えた声で言う私。なんか誘惑してるみたいだなあ……。

「いや、そのー、なんて言うんですかね……そのー」

茂野が真つ赤になつて困り果てている時、

「はじめてキヤバクラに行つた男か、お前は？」

後ろからこつそり近づいたケンイチが、『じきりゅうじきーっと一氣に茂野の首をひねる。

「うつわ……」

スゲー鈍い音……。思わず声を上げる私。

「おおおおお……！」

茂野は首を両手で抑え、痛さなのか音の凄さなのか、とにかく膝を突いた。

「首の間接を鳴らしたぐらいで、大げさな……」

ケンイチは呆れるが、

「いや、フツービビるつて……」
ツツコミを入れずにいられなかつた。

ひうやつて。

一人で話してたら、茂野が来て。

三人で話してたら、愛美が来て。

どんどん人が増えて、いつだつたか『帰宅部』と呼ばれるようになつた。

帰宅部なら同じ人間はいくらでもいるのに、私たちのグループはそう呼ばれた。

ケンイチがいるからできたモノだらうか、私がいるからできたモノだらうかそれとも、ケンイチと私でできたモノだらうか？

要因はどうでもいい。ここに、みんなはいる。きっと誰かが、私の知らないところで私とケンイチみたいに恋をし、私とケンイチではできなかつた支え合いをして、私とケンイチに相談を持ちかけてくるのだろう。

今、時間はゆつくり、そして、早く過ぎていく。

相葉洋子 一年（後書き）

えーすいません。後半、走ってしまいました。
後に主流となる帰宅部のテンションがこんな感じになると想つていて
ただければ、ありがたいです。

インターバル

その日は雨が降っていた。私の記憶では始業式の終わった後か、次の日の土曜日だったはず。午前中に授業もすべて終わって放課後の図書館。珍しく私は一人だった。せつかくの一人なんで、帰り途中に本屋にでも寄ろうか。

そんな事を考えながら、だらだらと時間を潰す。なんだかんだで、みんなを待つ自分が可笑しくて笑う。

ふと、外を見る。中庭の方を、見てしまった。

男が一人、雪の積もった中庭で対峙していた。雪？
違う、雨で落ちた桜の花だ。中庭を囲む桜が、落ちて真っ白な絨毯になっていた。

白い原の上で、二人の男が向かい合つ。片方は遠くから見ても、ずぶ濡れなのが解つた。雨が土砂降りになつたのは、一時間前、あれだけ濡れるにもそれだけの時間がいる。濡れている男は、ずっと雨の中立っていたのだろうか？

「……！」

濡れていらない男の口が動いた。何を言つてるかははつきりと分からぬ。野次馬気分で窓をこつそり開けた。窓が開き始めるくらいで、

「嫌だ！ 納得できないですよー？」

濡れている方が叫んだ。この声は聞き覚えがある。茂野だ。

何で……？

「聞き分ける。後は俺たちの出る幕じゃねえ」
もう一方はケンイチだった。

何で、何で？

「兄さんはどうも思わないんですか？」

ケンイチは何も言わなかつた。いや、何を言つたか考えていたかもしない。茂野には余裕が無いらしく、

「……行きます。アイツ、殴るだけじゃ『気が済みません』言いながら、すんすんとケンイチの方へ、学校の出口へと向かつていった。

ケンイチと交差する瞬間、

「止めとけ」

茂野の首に、ケンイチの腕が掛かる。茂野はそれを強引に払いのけた。

茂野があそこまでケンイチに反発するなんて……。

私を驚かせるのはそれだけでは済まなかつた。

再び進もうとする茂野。急に彼の体が後ろへ倒れた。

振り下ろした右手を戻すケンイチ。何を言つわけでもなく、茂野を見下ろしている。

殴つた。ケンイチが茂野を……？

そして茂野は起きあがるなり、

「つ……ちっくしょおおー！」

ヤケクソにケンイチに向かつていった！

再び殴り飛ばされる茂野。

そのたびに起きあがり、向かつていっては倒された。

「止めて……止めて！」

私は叫び、図書館を飛び出した。長い廊下を走り、角を曲がり、上履きである事すら忘れて、中庭へ踏み込んだ。

「止めて！」

と、叫んだときにはもう茂野は動いてなかつた。血と腫れで真つ赤な顔をして、横たわつてゐる。

インターバル？（前書き）

おまけ・言い訳・人物紹介

インターバル？

夕焼けばかりが眩しくて
あの日の影を忘れてた
共にいる友と歩く道
友の分だけ影は伸びる

楽しいことだけ増えてつた
悲しい分だけ忘れたい

今じゃ楽しいことは語るけど
悲しいことは思い出す

両手を広げて追いかけた
肩を窄めて恵まれた
大きなものがほしくても
小さなものしか奪えない

隣の消しゴム使つたら
後からジュークをねだられた
あいつにジュークをおじつたら
真夜中涙で返された

空の青さに気づくのは
窓辺に席替えされたとき
空の曇りに気づくのは
教壇の前に座るとき

点を稼いで振り返り

後を追われて嫌になる
点が低くて見上げれば
追いつけないとあきらめる

あいつの想いは募つてく
オレへの気持ちは離れてく

昔を思えばつらいけど

帰りたいのはその昔

帰宅部を象徴する詩と思つてください。

僕が未熟なせいもありますが、作品の時間の流れを軽く説明した
いと思います。

帰宅部は相葉洋子、石田ケンイチが卒業するまで、一連の流れ
となります。一話」と「一年経っています。

これから発表される作品は外伝が二話、本編（最終話）で計三話
となります。

外伝は相葉洋子が三年の時に起きた事件です。ここだけは本編と
の時間間隔を無視していただけると助かります。

（まあ、読んで分かるようにはしてるつもりなんですが、ちょ
と自信が…）

以前、発表されたインターバルは本編とも外伝とも繋がるので、
あえて分けて発表しました。

正直に言つと、元は外伝が先にできて、最後に相葉洋子の話がまとめてできていました。

WEB小説の特性を利用して、全ての話をちゃんと時間順に描きたいと思って、このような流れに変更されています。

と、ついでですが、改めて人物紹介やつとります。

相葉洋子（三年生）……本編主人公。三年生の時点で帰宅部内にとどまらず、校内中に恐れられる女帝。ケンイチとは複雑な感情のまま、友人として落ち着いている。

茂野（二年）……外伝1主人公。相葉に一目惚れし、ケンイチに騙され、気付けばケンイチの舍弟的位置にいる。不幸な青春野郎。騙されたことに関しては、今ではどうでもよくなっているらしい。

愛美（二年）……外伝2主人公。相葉の舍弟（妹？）。茂野と逆の立場なワケだが、別に対立しあつてゐるわけでもない。口ゲンカ仲間ではあるが、茂野のことが気になつてはいる。というか、どうしようもなく好きなのだが、茂野の告白や、普段からの相葉への態度も見ていて、踏ん切りがつかないでいる。

メイ（二年）……外伝1・2のヒロイン。そして、本編でも裏ヒロインになるという活躍ぶりを見せることになる。人を惹きつける魅力があるが自覚が無く、人間トラブルを引き起こすことが多い。たまに合同写真を撮るときに、「君、もうちょっと前に来て」というシーンがあるが、彼女の場合、写真をとるたびに言われる。老若男女問わず、どうしても気になってしまふ子といつやつである。

迫下（二年）……トラブルメーカーになれないトラブルメーカー。でも、波乱はコイツが持つてくる。外伝1でも、えらい言われようと扱いだが、そういう星の元に生まれたとしか言い様がないほど、どうしようもないものである。気に入った女性は自分の自慢話で口説く、嘘体験談で自己アピールして周囲が退く、めげない。入学早々、同学年に囮まれてるのを、茂野が助けたことで、彼について回っている。茂野曰く「助けなきやよかつた……」苦労してるようである。

石田ケンイチ（三年）……本編・外伝の影の主人公。柴田亞美の漫画に「完全無欠の少年は欠点だらけの大人になる。でも、欠点は克服できるから、人間は面白い」ケンイチは欠点に気付き始めた少年である。彼の現在に至るまでの糺余曲折が本編で語られるることは無い。だが、同年代や後輩は彼が「大人」に見えるであろう。それすら、彼の苦悩の内なのに。相葉との関係については、彼女は「内」で処理したが、対して彼は「外」で処理している。それが後にどう影響するか。

インターバル？（後書き）

言い訳とか本来するもんぢゃないですよねえ……反省。06/07
／19にちょっと構成変えました。携帯で見づらいそつなので。

茂野 一年（前書き）

帰宅部シリーズ外伝1

茂野 一年

茂野は授業を受けていた。電車の線路沿いに校舎があるので、時折の騒音が授業を妨害してくれている。

霜が走った窓の側、寒さと騒音の最も眉をひそめるべき場所にいる茂野は、この寒さも騒音も好きだった。先生の声がかき消されるたびに、小気味な爽快感が胸を通り、堂々と授業をサボる気になれる。寒さの方は昔から慣れた物だ。先生もこの電車の音で、やる気がなくなる生徒や茂野ではないが、それを利用して授業を放棄する生徒がいるのを知っているので、注意するだけ無駄だと開き直っていた。

茂野が居眠りを決め込んでいると、隣の迫下が名を呼ぶ。せっかくの眠気を払われて、うざつたる視線を向けるが、

「メイの事、知ってるか？」

「」のクラスになつて半年が過ぎたんだぞ、知らないはずがないだろう、何言ってやがんだこの馬鹿」という表情を茂野は返した。迫下は分かつたのか分かつていなか

「アソシこの前、ヤつたらしいぜ」

下世話なヤツだな、茂野は嫌気が差した。

迫下はクラスで2・3を争う程の嫌われ者で、外見は太つているが、それ以外に問題があるわけではなく、こんな下世話な噂を広めたり聞き集めたりする所が、原因になっている。昔、迫下のそれを知らない女の子が付き合い、舞い上がった彼は有ること無いことを広め回つて、一週間もしない内にフラれた。

それでも、

「オレやつたら、彼女なんていくらでも作れるわい」

などとめげないのが、みんなの苦笑を呼び、ワースト1位にはならないのが幸いである。

「誰とやつたと思つ?」

茂野は迫下のこの点は嫌いだが、根は悪い奴ではないと思つているので、

「誰だよ」

いつも同じく話の時は、適当な相づちを打つて聞き流していた。

「兄貴らしいぜ」

耳を疑つた。

「あ？」

ガラ悪く聞き返す。

兄貴とはケンイチの事で、茂野達の一つ上の先輩である。ケンイチはいつも図書室について、いつの間にか茂野は彼と仲良くなつていった。兄と呼ばれるのはその慕いややすい本人の性格から来ている。そして、茂野はケンイチに憧れており、茂野の性格は大分彼に影響されている。だから、

「ケンイチ兄さんが何で…？」

茂野は不思議でならなかつた。

「なんでメイなんかと」

メイは美人と評判である。ケンイチとも確かによく話す。しかしそれでも、ケンイチがメイと付き合ひとは考えられない。

「相葉姉さんは？」

ケンイチが図書室にいる理由。それがこの女性。唯一好きだと言いい、しかも公言してしまつていて。しかも相葉も好きといつ。だが、二人は交際することはない。

「何で付き合わないの？」

茂野は質問したことがある。その時一人は笑い、

「そういやそうだな、付き合おつか朋代？」

「別にいいわよ」

冗談が本気か分からぬ。けれど、そんな事をさらり、と言つてしまえるほど二人の仲は深くも見える。

茂野は相葉が好きだった。このケンイチとメイの一件は無情にも、茂野に密かな幸運を感じさせたが、このケンイチのらしくない行動

は、茂野に苛立ちも感じさせた。

「やっぱ兄貴はもてるなあ」

迫トのしみじみとした声。茂野は、

「黙つてろ」

ハツ当たりに、制した。

茂野が葛藤に悩まされる中、血食のチャイムが鳴る。

「兄さん！」

茂野と親しいメンバーが集まるお皿の図書室。怒鳴り声が静寂を崩す。

そこに茂みの眼はあるが、返事は無い。茂野がもう一度口を開く。

兄…

「…」

「ん、と鈍い衝撃のあとに鋭い痛み。どうやら何者かに鈍器のような物で叩かれたらしい。」

「姉さん……」

振り返れば文鎮を手に、相葉がにやけている。図書委員の腕章が腕組みで歪んでいた。

「あんた、この前も注意されてんだから静かにしなさこよ」

整理中の書類に文鎮を置いた。いや、戻した。

「めん、あのさ、姉さん、兄さんの噂聞いた？」

「何よそれ」

「メイと付き合つてるつてこいつ……」

茂野は口に出した瞬間ぱつが悪くなり、尻すぼみになつた。だが、

「へえ、そう」

以外にも、相葉の返事はあっけらかんとしたものだつた。先の会話とをして変わらない、茂野は何か不満が湧いた。

「くえつて、何とも思わんの？」

「何を思えつていうのよ」

茂野の苛立ちをものとしない。真正面からそう言われ、茂野は口

「ごもつた。相葉はいつもこの調子の強気の女であり、茂野もそこが好きなのだが。

「あのね」

面倒臭そうに、椅子に座る。

「いい、茂野？ 私と大悟は確かに前、お互に好きって言つたわよ。でも、それがどうだって言つの？」

「どうって……」

苛立つように問いつめられる。怒られてるようだ、つい下を向く。

「別に彼氏彼女って関係でもないのよ？」

（分かっていますよ）

「大悟が誰と付き合おうが、私の知つた事じゃないし、それこそアイツの勝手でしょ？」

（だつたらお互いに好きとか言つなよー）

「分かつた？」

（分かりませんよ）

「分かりました」

茂野は心情とは裏腹に答えた。言い出せない自分に嫌悪を感じた。二人の会話があらかた終わり、

「姉さん、キツいねえ」

と、愛美。相葉に唯一文句を言える一年生。大抵、男でも女でも相葉はケチを付けられると、ビンタか罵倒で返されるが、愛美はお気に入りらしく、同性愛と冷やかされる程可愛がっている。

「だつて、コイツ「納得いかない」って顔に出てんだもん、説き伏せたくなるわよ」

今だつて無理に納得したし、と付け加え、茂野をどきり、とさせた。相葉は時折その一言が鋭い。

「でも、メツチャヘこんでるやん」

愛美は心配そうに、言つ。茂野は愛美的気持ちを知つていた。しかし茂野は、冗談めいて、

「いや、姉さんがキツイのはいつも事だし」

確かに落ち込んでいた、苛立つたはずの気持ちを、立ち直つたかのように見せた。愛美の気持ちに答えられない自分がいる、なるべく心配を掛けまいとする心が、茂野の気持ちをリセットした。

「何よ、私はいつだって優しいじゃない」

「あーあ、若いのにもう耳が呆けたんや」

厳しいと優しいの意味は違うのに、そう言いかけた時、

「この……」

「ゴメン、ゴメン！」

相葉の投げるスリッパを怖れ、茂野は飛ぶように図書室から逃げ出した。

図書室を左に、外を右にした廊下を突き進むと講堂に出る。そこは広く、中央にある大きなガラスの天井が秋となつた今でも眩しく、優しげな暑さを一帯に広げていた。

そういえば、と茂野は思いだす。ここで相葉とケンイチ、初めて二人と出会つたのだ。楽しそうに笑つて話す二人。その時の相葉を見、自分もあんな彼女を持ちたいものだと、勘違いしていたが、今、彼氏と勘違いしたケンイチを慕つてゐる自分。何だか妙なことだよな、茂野はほくそ笑む。

ふつと、今の二人のことが浮かんだ。少しも変わつていない、憧れて、慕つていく内に変わっていく自分と比べ、明らかに落ち着いている。他の上級生とも一人は異質な雰囲気を放つていた。

だから、惹かれているのだろうと思う。先程叱られたときも、何かしつかりと芯のようなものをもつて話すイメージを感じられた。部活動などでも、部長がそんな感じを持つてゐるが、茂野は一人が何にも属さずにその芯を持つてゐるといふことが、うらやましかつた。

（あの姉さんがあんだけ言つんだから、オレ、余計なことしてんのかな）

だが茂野にとつてやはり、あの一人はベストカップルなのだと思わざにいられない。相葉の言つことはもつともだが、ケンイチの言

動、行動を考えると同じ男として絶対に、他の女とは付き合えない。茂野はどうしてもその考えを捨てきれない。少しでもケンイチに近づきたい、その憧れの気持ちは今や茂野を頑固にする元になっていた。

(兄さん……そういうえば兄さんは何処?)

茂野は講堂から去る、授業開始のチャイムはどうに鳴り終わっていった。

授業に遅れ、説教を喰らい、笑われてる内に放課後になつた。そんな午後の授業だった。

「兄さん、今日来てないのかな」

いつも帰るメンバー。今日は五人と少なく、いつもなら十人近くが集まる。部活や、授業の補講などが長引いて、結局この人数になつた。下駄箱前である講堂に集まっているが帰らない、茂野が五人の予定にしているケンイチを待つている。

迫下が笑う。

「一步違えば、ヤンキーとかチーマーみたいな人だよな」

ケンイチは平氣で高校を休む、授業はサボる、煙草は吸う。そのくせ、先生には愛想がいいと変わつた人種であつた。

「あいつが一步間違う事はないわよ」

相葉がつまらなく呟つ。

「なんで?」

愛美が首を出してきた。

「馬鹿だからよ」

「姉さん、それ、答えになつてない」

愛美が笑つたが、相葉は真面目だつた。

「アイツは馬鹿だから間違え方を知らないのよ」

なるほど、二人は冗談にとつた、茂野には笑えなかつた、相葉の言い方に何かの含みを感じた、それが何かはよく分からぬ。

「茂野、いつまで待つのよ?」

相葉が問う。先と表情は変わらない。

「 もう帰るわよ」

そう付け加えて。茂野は黙っていた。

「 もう帰ったのよ」

ケータイが鳴る。相葉が応答した。

「 あ、ケンイチ。うん。分かった…うん、それじゃ」

「 姉さん、代わって！」

茂野が急ぎ、相葉のケータイを取る。通話は途切れていた。

「 今、メイの家にいるんだって、教室にいないと思ったら」

どうしようもないケータイを茂野は返しながら、

「 兄さん、何してるんですか？」

厳しく尋ねた。その言い草は相葉を非難しているかのようだ。

「 だけん、兄貴とメイは」

迫下の横やりが茂野の緒に触れた。

「 やかましい！」

迫力に押され、迫下は閉口させられた。茂野はそのまま帰った。メイの家に行つてみようか、そんな気も起きたが、知らない。探す氣も調べる氣も起きない。ただ、この苛つきを眠つて解消しようと考えた。

深夜、ケータイのメロディーが鳴る。茂野は結局眠れずにゲームで夜を潰していたせいで、相手を待たすことなく、通話ができた。

「 もしもし」

メイの声。何の用だ、茂野は何となく不機嫌に応答した。今日のことが響いている。メイは気にせず、

「 ケンイチさんが」

いや、それどころでなく、同じ固有名詞を何度も呟いている、その声はかよわい悲鳴に感じる。

「 どうしたんだ」

茂野はその気配を感じ取った、質問には緊迫感の色が含まれている。

「死んじやう」

場所は遠いが、自転車を飛ばした。

くたびれた駅の近く、さほど小さくも大きくもない駐車場。そこは妙に明るかった。人だかりとそれを遮る警官、ストロボや強めのライトが眼に痛い。茂野が背伸びをすると、そこには白いテープが人の形を模して地面に這っている。その脇腹には、血溜まりができる。

（「ケンイチさんが……死んじやう」「う」）

茂野がまさかと顔を青ざめていると、

「茂野」

呼ぶ声がした。

左隣の小さな公園を見る、奥のベンチに相葉と愛美がいた。そういえば、この辺りは相葉の近所だったことを思い出した。暗がりのそこへ行き、軽く手を挙げた。

「何でここにいるのよ？」

いきさつを話し、一人の様子を見た。相葉の顔が曇り、愛美の眼が揺れているのは暗くて、茂野には見えなかつた。

ただ、空気を伝わる気配だけで動搖をしているのだと思いこんで、

「姉さんたちは？」

普通に聞き返した。

あの血溜まりはケンイチのモノだらうか？

聞きたい自分を抑える。もし、口にすれば更に動搖しそうな気がしたのだ。おかげで相葉と愛美の反応がそれだけで無いことに気付けなかつた。

「うちらは野次馬よ。コンビニの帰りにあれが見えたけん」

相葉は人だかりを一瞥しながら答えた。愛美が相葉の袖を掴み、

「姉さん、もしかしてケンイチ兄ちゃんが」

「ンな事ねーって、兄さんな訳ないやん」

怯える愛美を茂野は笑つた。内心、わざとりしいかなと、危惧しながら。

少しの間に沈黙が入つた、茂野は何だか気まずくなつた。

相葉が溜息を鳴らした。

「ま、メイの事も気になるけど、いないのなら、ショーガないわ。ウチ来る茂野？」

「そうね、どうする？」

相葉の意見に愛美も同意する。茂野は行こうか迷つたが、「いや、なんか気になるから、もうちょっと回つてみる」逃げ口上をしてしまつた。今の状況で、相葉の家で遊ぶなどと、自分の中で気が咎めた。

「じゃあ、付いていこつか？ ウチらも暇だから？」

相葉の問いに愛美がこくり、と同意する。茂野は手を振り、「いいですよ、こんな時間に連れ回したりそれこそ、兄さんに怒られます」

冗談で断つた。相葉は笑う。

「あー、変なトコでうるさいもんねー、アイツ」

相葉が納得したのなら、もう帰つてもいいな。茂野は失礼します、と一声掛けて自転車に乗り込む。

「気をつけんのよ」

「はい」

相葉の注意に返事をし、

「明日学校でねー」

愛美的声に手を振りながら、

（今夜の疑問は明日になれば分かる、メイは物事を大きくするのトコあつたし）

そう思ひこんで帰つた。

「メイの事、知ってる？」

翌朝、迎下の第一声は挨拶ではなかつた。

「朝っぱらから何だ？」

茂野はやれやれといった風で、聞き返す。

「おい、眞面目に聞けって……とりあえず」口づけ来いよ
お前の存在自体が眞面目じやない、そんな冗談を言いながら、一人は教室の隅に身を寄せた。迫下が肩を掛け、噂だけど、と、前置きを言ひ。

「メイ、妊娠したらしいぜ」

耳にした途端、茂野は吹き出しけた。昨日の話と統合するとい

「兄さんの……？」

そういうことになる。

「噂や噂、けど、昨日とか産婦人科の前にいたしな……」
「フォローなのか、証明なのか、聞いてる側をえらい不安にさせる
迫下。

「いただけだろ？ 入ったとか出て來たら、問題やけど」

内心の動搖を抑えながら、尋ねる茂野。

「だったら、メイが（産婦人科を）ジロジロ見たり、急にしつつむいてり、兄貴がなだめてたらは変だろ？」

「なんで、わざわざそんな細かいトコまで見て来るんだこの馬鹿は。茂野はそう言いたくなつたが、まさか、の声が頭にこだまするのを感じて黙り込んでしまつた。

HR開始のチャイムが鳴つた。少し間を置き、担当の教師が教室に現れた。皆が席に着き、恒例の挨拶を終えると、

「伊藤、遠藤、加藤……」

出席確認が終わつた。生徒の私語も、話を聞く氣があるのか、なんとなく静まつた。茂野も授業に専念することにした。

「えー、今日、一限から先生の授業があるが、休みになる」
小さなざわめきが走つた。歓喜……だな、茂野はそう思つて苦笑した。しかし、小さく舌打つ、先生の休講理由は茂野にとって、とんでもないものだった。

「実はタベ、このクラスの梅井が、警察に補導されたらしい」

(……ー)

メイが補導された。担任の話では、昨日にあつた事件の参考人として、補導された。時間も遅かったので、今日の朝にまた事情聴取のため、出頭することになつたようだ。

茂野は昨日の午後といい、今日の午前の授業といい、何一つ耳に入る余裕が無かつた。

昼食の鐘が鳴る。

「兄さん！」

連日で、図書室の沈黙を破り、

「昨日も言つたわよ」

「じん、と今日も相葉にこづかれた。すでに来ていた迫下と愛美が笑う。が、今日の茂野はめげなかつた。

「姉さん、それどこのじやないんだって！」

「知つてるわよ」

興奮する茂野に、相葉は冷たく言い放つ。同じクラスの人間に聞いたら、と茂野を納得させた。

しかし、結局、相葉はそれを裏切るような内容を口にする。

「ケンイチが刺されたってんでしょ？」

茂野は自分が遠くに行つてしまいそつた錯覚を起こし、よろめいた。

「何やつてんのよ？」

そこまでやるか、と眉をひそめた相葉に、

「オレの話聞いたら、姉さんも同じ事すると思つ」

茂野は自信もつて返答した。相葉は迫下の噂とエマの話を聞くと、

「精神性発汗つてホントにあるのね」

頭を抱える。確かに毛穴が開くような感じではあつたなど、茂野も同感する。

「分かつてくれた？ オレの気持ち」

「すつごい認めたくないんだけどね」

いきなり疲れ果て、腰掛けた机にそのまま突っ伏した。茂野も椅子に座つて、前のめりにつなだれる。

そんな時氷迫下が、神妙な顔をする。

「姉さん」

「何よ？ 変な顔して」

やる気なさ気に返答する。

「一人の話聞いてたらセー、メイが兄さん刺したって事なのかなあ？」

茂野と相葉と愛美は一瞬、冷や汗が全身に流れた気がした。

「それ、『冗談にしどいで。お願ひ』

「オレも」

二人は悲しい声で頼むが、迫下はまだ考える。

「じゃあ、兄さんは誰に殺されたの？」

『殺すなー！』

「じゃあ

「いや、もう考えないで」

「聞いて想像するのが辛いから」

相葉、茂野ともう泣きそうになつてく。愛美に至つては、迫下来じつと睨んでいた。

「分かった」

迫下は気圧されたのか、素直に承諾した。

「そういうや、お前の方が先に来てるのに、何で言つてねえんだよ」
噂を広げるコイツが珍しいな、と茂野が聞く。迫下はにこりと笑

い、

「いや、寝てた。なんか先生の声ってみんな眠くない？」

『お前だけだよ』

溜息をつく三人に、重い午後が流れ始めた。
放課後、三人は気を持ち直して、

「みんな、最近忙しいわね」

今日も都合で昨日と同じメンツで帰る。

帰りの話題は言わずとも知れた物だった。

「ケンイチは今、入院してるわよ。退院は一ヶ月以上かかるらしいつて」

茂野がケンイチについて聞いたので、相葉が答える。メイは？そ
う聞き返して。

「メイの方は明日にでも出でくるって、帰りのH.Rで言つとつた」

「じゃあ、メイが刺した説は消えたね」

迫下は無視された。

「実はケンイチが通り魔に刺されてて、それをたまたまメイが発見
して、警察に事情聴取つて形が一番いいわねー」

と、相葉の仮説。

「結局兄さんは不幸つすね」

「事実が事実やけんね」

茂野と愛美が笑う。

「だつたらさ、メイは何で補導されたんかな？」

迫下はまたも無視された。

「最悪はメイがホントに刺して」

「兄さんが、か」

相葉の二つ目の仮説に茂野が続ける。

「もー、止めてよ、一人とも」

愛美が不機嫌に訴えた。

「それ、さつきオレが言つた。へへつ……」

迫下は無視。三人の中で暗黙の了解が成されていた。愛美などは、
次に言つたらカバンを投げると決め込んでいた。だが、迫下はやつ
と空気を読めたのか、それつきり口を閉じ、愛美のカバンが活躍す
ることはなかつた。

「とにかく明日になつたら、メイに聞きましたよ」

「そうつすね」

「さんせーい」

相葉の案に茂野、愛美と続いた。迫下は大人しく、その話が別の

話題に変わるまで黙つていた。

(しかし、昨日の見通しが甘かつたなど、思わせる一日だつたな)
ケンイチならばどう考えどう動いたどうか、そんな事を想像しながら、茂野は帰つた。

ケンイチとメイが学校に来なくなつて、3日目になつた。季節と、人が集まらない時間帯とが合わさる中、

(メイはもしかしたら今日も来ないかも知れないな)

茂野はそんな事を教室で考えていた。幾人かが震えている。誰かが平然とする茂野を否めたが、鍛え方が違うと茂野は笑つた。

ぱちーん！

威勢の良く、何かの音が飛んできた。廊下の方が、何の音だろう、と茂野や何人かが扉まで移動して頭だけや体ごと、各自が廊下に出れば、何人かの人だかりと、涙ぐんだメイがいた。その足下には、迫下が尻を着いて頬を押さえている。

(ああ、ひつ叩かれたな)

そう理解するには充分の条件と雰囲気が感じられた。

(どうしたんだろう?)

迫下が女子に平手を喰らうのは、普段珍しいことではない。しかし、理由も無く叩かれることが無い。

メイが口を開く、茂野は耳を澄まして、その口の動きを注目した。

「……何も知らないくせに、いい加減な噂しないでよ！」

怒鳴つた瞬間、ぽろぽろと涙がこぼれた。女の子のこんな姿は、否応に茂野の胸を締めつけ、周囲もシン、となつた。

「アンタ、ケンイチさんが何したのか分かつてんの？ 知らないんでしょ、知らないんでしょ……！」

一発、二発、三発と、がむしゃらに両手を振るう。茂野は懸命に防御する迫下の後頭部を見て、気付いた。メイの左手にカバンがあ

り、それで殴つていることに。メイのカバンの端は鉄で補正されている。そんなもんで殴られたら……と茂野はぞつと、危険を感じた。

数人をかき分け、

「メイ！ 止めろ」

茂野は厳しく言い放ち、メイの両手を捕まえた。

「迫下！ とりあえずお前も謝つとけ！」

茂野が首を後ろにひねると、鼻血を垂らした迫下が何度も頭を下げる。茂野が肩を動かし、メイにそれを見せる。メイは途端に両手の力が抜け、2回3回鼻をすすると茂野に寄りかかり、小さな嗚咽を漏らして泣き出した。

困ったな……でもとりあえず、と、

「いつまで見てるんだ！」

人払いをし、茂野は人気のない場所へ泣きじやぐるメイの手を引つ張った。図書館の裏、そこがいいと二人は、高めのフェンスと校舎に挟まれた、窮屈そうなスペースの奥に座り込んだ。暗がりのそこはよく、人に言えない相談の場所や、煙がごまかせる事で喫煙所になっていた。

茂野はメイの背中を撫でて、落ち着かせようとする。

「何があつた？」

メイは幾分か落ち着き、声をひきつかせながらも、事情を話し出した。

「……それでタベね、朋姉さんから、電話があったの」

あらかた話しあり、茂野はただ、聞いていた。メイは大分落ち着いたが、

「それで、さつきの話をして、迫下の噂とか教えてもらつて、私も悪いから、どうも思わなかつたんだけど……アーッ、私がガッコに来た時……。

「兄貴上手かつた？」

つて、聞いてきたの。それで、カツとなつて

言い終えると涙がぶり返し、ふさぎ込んでしまった。茂野は黙つて聞いていた、何を言つたらいいか分からぬ、ただ、茫然とするしかなかつた。

一時限目の授業は終わつていた。

放課後、茂野は相葉を呼び出し、朝にメイと話した場所に来てもらつた。相葉は来るなり、

「メイとあの馬鹿の事でしょ？」

問いには怒りが混じつている。

「そうだけど、姉さん、何怒つてるの？」

茂野はちょっと怯えて、尋ねた。

「頭にも来るわよ」

続けて、

「いくら、メイが元カレにいいようにされてたからつて、そのカレシに文句付けに行つて刺されるバカが何処にいんのよ？」

早口に叫き、校舎に蹴りを入れる。

（いや、巻き込まれたつてゆーか、首突つ込んだつてゆーか……）

茂野はそう思つたが、相葉の機嫌が悪そうなので、思うだけに留めた。

メイは昔の交際相手にセックストを強要されていた。メイも気が弱く、されるがままにされていたのだが、それでも、

「もうやめよ」

と口にはした、しかし、

「うるせえ」

殴られ、暴力で押さえ込まれた。そんな人種に他人を巻き込むわけもいかず、躊躇しているうちに、生理が遅れるという事実が発覚した、元カレに言えば、

「知るか」

と、二度と姿を見せなくなつた。それは良かつたが、妊娠疑惑は

どうしようもなく、途方に暮れていたメイに、ケンイチが気付いて相談に乗った。ケンイチは妊娠検査の器具などを購入したり、産婦人科に付き添い、メイは泣きながら礼を言った（迫下に見られたのがこの場面らしい）。幸いにも妊娠は無かつたが、その日にはメイの元カレから電話が来た。

「責任をとるから、また付き合おう」

先の行動からして、メイにとつてそれは白々しく、

「嫌」

と、はつきり断る。だが、彼はしつこく、

「会うだけでも」

無理に約束をさせられ、それにケンイチは付き合つた。

メイは、

「信用できないし、ヨリを戻したいとも思つてない」

とだけ言い、去ろうとした。彼はキレて、メイに殴りかかるうとした。が、止めに入つたケンイチとケンカになる。ケンイチは強く、彼は手も足も出なかつた。そして、彼は切羽詰まり、「キャー！」

ナイフを持ち出し、ケンイチを刺した。

「…………！」

血に驚いた彼は、そのまま逃げ出す。そして、立ちすくんだメイ、腹を抱えて倒れたケンイチだけが残された。ケンイチは意識がまだあり、メイに救急車を頼み、担がれていつた。その後、ケンイチは通り魔に刺されたと一点張り、メイもそれに合わせた。救急車の来る間にメイと打ち合わせしたらしい。

「でも、オレらが見た事故現場が、ホントに兄さんの刺された場所とか、思わなかつたね」

相葉の機嫌が悪いままなので、本人が乗つてきてくれるような話ををしてみる。内容が笑えない。

「あと、メイが茂野にだけ電話したのは、ケンイチが救急車の来る

寸前に意識を失つて、メイがビビッたからとかね」

言われて、茂野はぎくりとした。特に後ろめたいわけでもないのに、なんだか、そんな気がする。茂野には何故だか解らない。少し考えた結果、それは流して、話を変えることを考えた。ケンイチへの疑問が思い出された。

「元凶は元力の人に、何であんな事したんですかね」

そう呟く。メイに話を聞かされたとき、この事が一番強かつた。相葉がフェンスを見つめる。

「多分、後のカレシの報復を怖れたのよ。少年院とか鑑別所とかに入れられても、ちゃんと更正されるとは思えない、それよかビビッたままの方がいいってね」

だが、視点はもつと遠くにあった。

「それが一番正しいんですか？」

メイの昔の相手に同情する余地などあつたのだろうか、そんな匂いを含ませて、聞いた。

「そんなの分かんないわ。大人なら、捕まえた方がいいって言うかもしれないけど、あのバカはもつと違うトコで見てるから」相葉の答えは勿体ぶつたものだった。

「兄さんは何処を見てたん？」

「知らないわよ。ケンイチがどう考えて方はさつき言つたし、それも合つてるかどうかも分かんないんだから」

（姉さん、兄さんの考えることなんて手に取るように分かるって言ったのに）

「姉さんでも、分からんと？」

「私は茂野と同じよ、付き合ひ時間が長くとも、よく分からない事もあるわ」

どきり、とした。後ろめたいとかそういう類でなく、その言い回しやフレーズに妙に大人っぽい魅力を感じて、だ。そして、一年半近くに及ぶ付き合いの中で、ケンイチがよく分からなくなり始めている自分を見通されたような目が、なんとも言わせない。

「姉さんと同じワケないよ、オレより姉さんの方が知つてゐるって、同じワケない」

茂野は揺らいだ気持ちを殺して否定するが、

「つるさいわね！」

相葉の逆鱗に触れたらしく、怒鳴られた。

「とにかく、ここまで来たら私の出る幕なんて無いわ」

再びフェンスを蹴りだす。相葉のこんな姿、初めて見た。

「つたく、人の、心配も、放つといて、あの、バカ！」

「のままだと開くはずのない穴を、壁に開けそうな勢いである。何だかよく分からなくなってきたが、茂野はまあまあ、となだめ、

「とりあえず、オレの話は済んだし、そろそろ、みんな集まってると思うから、玄関に行こうよ」

などと誘つてみる。こゝそり、相葉は以外と子供なのかな、とう思いを秘めて。

「先に行つて、後からすぐ来るから」

茂野は一緒にきたかったのだが、相葉の雰囲気になんとなく従い、みんなの元へと歩いた。

「茂野、姉貴は？」

当の問題の人、迫下が其処にはいた。他にも愛美とあと何人か、その中にはメイもいる。そういうば、メイは何故オレだけに電話をしたのだろうか、疑問が湧く。聞こづとするが、無視された迫下が邪魔をした。

「おい、茂野つて」

じつと迫下を見る。鼻には今朝の件で張られたガーゼと穴に押し込まれた綿が見える。本人は何だよ、とたじろいだ。コイツのガセネタにも振り回されたのか、そう思つと、痛々しさへの同情よりも、腹立しさの方が優先されてきた。

「オレも殴つといつた方がいいかな？」

茂野がぼそつとそんな事を言ってみる。迫下は慌て、

「勘弁してくれよ、オレ、朝から「鼻血ブー」とか「高木ブー」とか、ずっとからかわれてたんだぜ！」

そのまんまと、皆が笑う。迫下が懸命に笑い事じやない、と言うが、それが返つておかしかった。笑い終えると、再び聞かれる。「ところで姉さんは？」

「姉さんは後から来るから、待つててつて」

『はーい』

皆でタイミング良く返事をした。それを見、相葉は伝言だけでも威圧感があるので、茂野は人知れず笑う。

「なあ、兄さんじゃなくて、オレが入院したらどうする？」

と、茂野の思いつきで出た問いに、

「兄さんが笑つて見舞に来ると思うわよ、何でも面白がる人だから」と、明るく愛美。

「私は何とも言えないね、ケンイチさんだったらかばつてでも止めるとと思つよ」

静かにメイ。

「兄さんは自分が刺されても面白がつてそーだよな」

「うん、どこまでもヨゴーありそつ」

と、何人か言った。

「オレだつたら？」

迫下の意見はぐだらなかつたので、誰も聞かなかつた。その後、無駄話に変わつていつたが、その中、茂野はメイにこつそり尋ねる。

「ケンイチさんは何でしたん？」

メイは一度、目を下に、考えて、

「多分……アイツだけを悪人にしてくなかつたと思う。ケンイチさんは誰からも憎まれない性格な分、誰も憎めないんじゃないかな」自信なさげに語つた。

「私、ケンイチさんとあんなに長くいたの初めてなんだけど、「自分よりも他人」みたいな考えがものすごく強い人なんだなあつて思つた」

「優しい人って事？」

茂野が首を傾げると、

「それは茂野の方がよく知ってるじゃない、そんな事聞かれても…」
こっちが困ると下を向いた。メイとしては懸命に答えたつもりだ。
自分よりケンイチと親しい茂野にケンイチの性格みたいな事を説明
するのは自信がない。

茂野としては、

(長く付き合つても、よく分からぬから困つてゐるのに)
と、溜息をついた。メイは少し、辛そうな顔をした。誰も気付か
ない。

「何の話してるの？」

愛美が一人に寄つてきた。メイが身を引き、三人の円ができる。
「んーと、兄さんの正体かな」

嘘は言つてないよな、茂野はメイを見る。頷き答えた。すると愛
美は腕を組み、

「甘い男なのよ、自分は殺せても、絶対、他人は殺せないの」
と、知つた風なことを言つた。相葉が言つたことだらう、と茂野
が指す。バレたか、と舌を出して笑つた。

「でも昔はそうじやなかつたらしいよ、姉さんが言つてた」

『へえー』

茂野とメイが関心を漏らす。じゃあ、昔はどうなのが、茂野は口
に出し、メイは顔に出すが、
「いや、そこまで聞いてない」

「使えん奴だなー」

愛美の返事に、茂野は心から言つた。

「ひつどーー！ 大体、なんでいつも兄さんと一緒にいるアンタ
がそんな事知らないのよー！」

「バカ、男は過去にこだわらないんだよー！」

「また、そんなトコばつか、兄さんと似るんだから、汚いー！」
言い合いの中、愛美的言葉が茂野の胸に刺さる。表に出さず、

「何言つてんだ、大体そんな事、答られない奴が悪いんだろうが…」
と、上手くはぐらかした。

「あんたも人の事言えないでしょ！」

「だから、聞いてんだろうが！」

「何それ！ バーカ！」

「へ！ 言い返せないんでやんのー、お前の方がバカだ！」

「二人とも不毛だから」

口ゲンカになり始めた二人に、メイが恐る恐る止めに入る。
その時、

「あ」

愛美が相葉を発見した。相葉は皆の元に来るなり、
「ケンイチからさつき電話があつたわよ」

そして、

「あのバカ、暇だからみんな見舞に来るよう伝えてくれだつて
みんな、おおよその経過しか知らないが、結果は知つている。
何持つていこうか？」

とか、

「見舞、勝手に食べようぜ」

とか、笑つている。

でも、相葉は行かないだろうな、茂野は思つた。多分、自分も行
かないだろう、とも。

「何考えて、何やつたかは知らないけど、みんなを振り回す人だな
あ」

と、誰かが口走り、誰かが、そうだなと笑う。茂野と相葉は苦笑
していた。

そのとおり、こんだけ振り回してくれたんだから、寂しい思いを
してゐる、あんな訳の分からない人は。そう思つて。

愛美 一年（前書き）

外伝1でトラブルを無事に解決できたメイ。その彼女にまた影が忍び寄る。しかし、その影は形すら成していなかつた。

愛美は茂野が好きだ。授業の合間の休み時間、昼休み、放課後、いつでも田に入ってしまう、探してしまう。告白はしていない、茂野が相葉のことを好きだと知っていたからだ。

(勝算のない告白はしたくない)

自分に卑怯さを感じながら、だがそれでも、

「ね、茂野、たまには髪型変えないの？」

そんな質問すれば必ず、

「バカ、これが気に入つてんだよ、分かんねーのか？」

そう返して、口ゲンカのキッカケを懲りずに作ってくれる茂野。(そんな風に付き合つてくれている今なら、急いて求める必要もないかな)

そう考えていた。

しかし、最近不安があった。茂野と同じクラスのメイ。先月くらいにメイが前の彼氏ともめた際、先輩のケンイチが巻き込まれ刺されるという事故があつた。その時、メイが電話した先が茂野だった。(ただの偶然かもしれない、自分の思い過ごしかもしれない)

けれど、見てしまった。廊下で泣きじやぐるメイに胸を貸してい

る茂野を見てしまった。

疑う気持ちが膨れ上がる。

『放課後になつたら、図書館の裏へ来て欲しい』

そこは高めのフェンスと校舎に挟まれ、窮屈そうなスペース。暗がりのそこはよく、相談の場所や、煙がこまかせる事で喫煙所だった。

呼ばれてきたのは相葉。相葉は一つ上の先輩、同じ図書委員、去年から世話になっていた。面倒見のいい彼女に、愛美はいつの間にか、

「姉ちゃん」

と慕い、仲良くなつていた。そして付き合つていていたが、その年齢とは不相応な考え方で愛美は惹かれ、今では一番の親友と思っている。その相葉が何やら田つき悪く、愛美を見つめている。

「アンタ、呼び出すんなら、私じゃなくてメイでしょ」

最も信頼する者からの厳しい声。ぎゅうつ、と愛美的胸が締めつけた、相葉の意見は的を射ている。

「私に甘えるために私の側にいるの？」

相葉は愛美を気に入っている、それは自分の意見が正しいと思つたとき、誰を相手にしても、例えば自分を慕う者の前ですらも、一步も引かない氣概があるからだ。しかしそれは意中の男性を前にすると別になる。

「そんなセコい真似する口なの？」

強い意志を見せる愛美だが、うろたえ、じりじりと引き下がつている。愛美的その様が、相葉の癪に障る。

「今のアンタがメイを呼び出せても、結局後悔するからね」

相葉は言いたい放題に、愛美的意見も聞かず、去ってしまった。
(そんな愛美とともに話す気はない)

そう言いたげな背中だった。

愛美は一人残され、ただ下を向くばかりだった。

(どうして私はこうなるんだろう？)

茂野に対して、もう一步前に踏み込めない自分、姉ちゃんの言う通り、らしくはない。姉ちゃんが指摘した、

『呼び出すのは私でなくてメイ』

自分がメイについて相談しようとしたのを見抜かれた。その上、内容が愚痴だと読んだ発言、言い返せない。そして姉ちゃんに言つことで、何かを解決してくれるかもしれない、例えばメイを呼び出して、事の真偽をハツキリさせてくれるとか

そんな考えがあった。

(セコい真似、と一蹴してくれた分、すつきりした、相葉がそこま

で考えて叱ってくれている）

愛美は確信した。1年以上における付き合いがそれを教えてくれる。そして、

「姉ちゃんの言いたいことが解る分、頼ってるんだ……」

その事実を痛感した。自覚した上で、自分がどうするかを考え。（メイと話すべきだという事。そうしないとスッキリしない、でも、メイと茂野のことを話すのは……）

（今までの関係を壊すかもしない）

それは愛美が最もタブー視していることだった。

「それが問題なのね」

だが、

『例え聞いた所で後悔する』

相葉の言葉が気になる。

（どういう事なのだろう？）

愛美は考えるが、その発言の意図だけが理解できていない。俯いてしまう。

「何してんの？」

校舎とフロアの間に小さく生えた雑草。踏みつけて現れたのは、梅田。クラスの違う、茂野の友人。愛美はあまり話したことはないが悪い印象が持ちにくい男というのを覚えている。

「いや、何もしてないよ」

愛美は口頭を少し、どもらせた。あんな事を考えている時に、人と出くわすのはつい、動揺を呼ぶ。

（迫下だつたら無視で済むのに）

そんな心中、梅田は微笑んで、

「もう授業が始まつとうとに、『げん拓』について、何もないワケなんかやる」

自分たちとはイントネーションが微妙に違つ、方言を喋る。愛美

は、

（余計なお世話）

思つ前に、

「梅田君つて、出身地何処だっけ？」

そつちの方が気になつてしまつた。すると、

「また、そげんこつ言つっちゃけん」

不機嫌に頬を膨らました。その動作が不意におかしく、愛美的顔がほころびかける。

「人が長崎の島やけんつて、バカにしとるー？」

そのまま見つめてくる。とうとう吹き出してしまつた。

(そういえば、茂野がそんな事を言つて、梅田をからかつていたな) 思い出し、

(じゃあ私のせりふ科白は確かに失礼だ)

そこまで考えつくと、余計におかしい。

「あ。笑つた、非道かー」

(うん、確かに非道い)

そう思つたが、狙つてこぼしたわけではない。

「違う」「違ひ」

口にするが、笑いが込み上げてか細く、聞こえない。

「かー、茂野ン彼女はおとなしか、思おちよつたけど、そげん人と
は思わんかったー」

ぴたつと、愛美が止まる、それは笑えない。

「……違うわよ」

否定すると梅田は不思議そうな表情をした。

「よく話してるトコは見たんでしきよけど、茂野が誰が好きなの
は、梅田君だつて知つてるんでしょ？」

さつきとは違つた感じで笑う、偽りと自嘲混じりの。

「相葉さんとかいう先輩？」

顔色を伺う梅田。

(マズイ事を口にした)

そんな考えが受け取れる。

愛美は座り込んで、

「うん……片思いなのよ、私の」

ボソッと、地面を這う蟻を見つめた。下を向くと田に入つて、理由もなく見つめたくなつた。梅田は何も言わず、煙草を一本、口にする。

「……何してんのよ」

視線を動かす。

「え、その、煙草ば吸おつかなー思つて」

うんち座りになつた梅田、

「煙草嫌いなんかな?」

気まずくなつていた分、その声は揺れた。

「私にも一本くれる?」

愛美は梅田にとつて意外なことを言い、

(何だか妙なことになつたな)

梅田は何も言わず煙草を渡した。火を点けると、勢いよく煙を吹き出す。喉ががりがりする、

(みつともなく咳き込むよりマシか)

愛美は涙目になつて再び吸い込む。煙草は初めてだつた、今吸う氣になつたのは、へいぜんと吹く相葉の事と、『いい女は煙草ぐらい吸えなきやいけない』

随分前にこぼしたケンイチの言葉を思い出したから、肺に入れてみたくなつた。何だか気持ちが悪い、

(なんでこんなもんが吸えるのがいい女なんだ)

ぐりりとする感覚によろけるそうでつゝ、地面に手をついた。

「おい、大丈夫かよ?」

梅田が心配になつて声を掛ける。愛美的顔は真っ青になつていた。

「おいおい、大丈夫?」

富山が心配の声を漏らす。ケンイチと同学年の男、十八とは思えぬ貴祿の外見を持ち、太い身体で、おっちゃんと称されている。あだ名のせいいか、割にか、纖細な気性で、そのギャップだか何だかを

同年代にからかわれたりする。

「すいません、心配かけて…」

青い顔のまま、愛美が申し訳なく謝る。保健室に一度連れて行かれたのだが、先生が不在なので、図書室のソファーに横にさせてもらつた。それに原因が原因だけに、不在の方が良かつたかも知れない。

そして、たまたま居合わせた富山が、それを手伝つてている。

「なーんで、吸つたこともないのに、煙草なんか？」

富山が尋ねるが、愛美は答えない。答えたくなかった、

(つむれい)

言つてしまひたかつたが、体の怠さが先にあるので口に出なかつた。富山は、

(気分が悪くて答えられないのだらう)と勝手に納得する。

「おっちゃん、何とかできんとね？」

梅田が懸命になつてゐるが、富山は両手を上げてすぐめた。

「お手上げ。せめてケンイチとかがおつたら、何とかなんだけどなあ……」

読みかけた本を取り、目線を移すと、

「アイツ、雑学王だから、こーゆートラブルはお手のモノやし」

言つて、そのまま読書に耽り始めた。

(ケンイチならそのうち来るから、待つた方がいい)

自分たちではどうしようもないことを富山は態度で告げてゐる。ケンイチは愛美や梅田の一つ上の先輩、富山や相葉と同級生である。ケンイチが梅田や茂野、その他学年下の者から兄と呼ばれるのは、親しみやすい性格からきている。その中で茂野は最も彼を慕つており、愛美はケンイチに少し嫉妬もすれど、自分の好きな相手がそこまで心酔する先輩に尊敬も感じていたので、小さな嫉妬がそれ以上に膨らむことはなかった。

具合悪く横になつた愛美、どうしようもないと富山、梅田はその

二人を視点に首を振つてうろたえていたが、結局、富山の意見に同意して本を読むことに落ち着いた。だが、愛美をちらりと見るとやるせなく、結局、側で愛美を見つめていた。

秒針が何度も回つただろうか。愛美の意識は未だ朦朧としていた。図書館の扉が開き、聞き慣れた声がする。ぶつきらぼうな言い回しで、親しみを感じる声、それは富山と梅田の言葉に混ざり、愛美の近くまで足音と共にやって来る。寝かせた身体を起こし、深呼吸、冷たいジューク、深呼吸と繰り返し要求される。途中、何か錠剤のような物を飲まされる。

(すっぴ)

そう思う内に、頭の中で重くのしかかつたものが、すう一つと抜けていく感覚。愛美の気分はどんどん透明になる。

目を開けると、

「兄ちゃん？」

富山と梅田だった。二人は愛美の顔を覗き込んで、笑っている。富山は、

「オー、起きた起きた」

と感心したそぶりで、梅田は視線を移し、

「すげー兄ちゃん、言つたとおりやん」

愛美から右の方向へ賛美する。愛美もゆっくり顔を向けると、ブレザーの裾が入り口に消えていくのを見た。梅田はそれを、

「あれ？」

首だけで追い、

「兄やん、何処行くの？」

呼びかけると、

「アソッ、相葉探してんだって」

富山が答えた。聞くと梅田は顔を苦め、

「かー、昼間つから女の尻追っかけて、何しようとかいな？」
それを聞いた富山が笑う。

二人の会話で、愛美はケンイチが居たという事を確信した。急い

で、図書室を出る。廊下は左右に長く、一人として姿はない。

「どうしたん、ケンイチに用事やつたんか？」

背後の声、梅田に言われて気付く。

（私は何の用があつたんだろう？）

呼び止めて何かを聞いて欲しかつたの？）

思うが、そこに行き着いた途端、愛美の中に自己嫌悪が起きた。

「ちょっとグチ聞いて欲しくって」

梅田に返事を返す。笑つて返したが、今にも切れそうな理性の糸は鉛を乗せて、愛美の心に痛みが走る。

（姉ちゃんが駄目なら、兄さんか……私は何で、女だらう。）

今すぐ泣き出して、大声を上げればどんなに楽かな。でも、それは何の結果も出さない。気を晴らすよりも、今は自分の迷づ事に踏ん切りを付けなきやいけない）

愛美はうつむきかけた頭を速く、起こし、

「梅田君、心配かけて、ゴメンね。おつちやんにも言つておいで」

歩き去る。うつすらと田尻に溜まつた涙を、梅田に見られたことにも、そのせいで梅田が何も言えなかつた事にも、気付かなかつた。廊下を進むと講堂に出る。広く、中央にある大きなガラスの天井は冬を伝えたがつているように、雪の存在を見せた。

（そういえば）

立ち止まり、思いだす。ここで茂野を見たことを。相葉と知り合つて間もない頃、メイと一人で次の授業の話をしながら、講堂を通ると、ケンイチと楽しげに話す茂野、その時メイは、

「茂野君と話しよー人、カッコよくない？」

ケンイチに興味を持つたが、

「そやね」

いい加減な相づちで流した、愛美にとつてはほこの時の茂野の方が気になつた。茂野がケンイチを見る目は、

（私が姉ちゃんを見る目と似てる気がする）

強く印象づいた。そのうち、相葉がやってきて、その一人と雑談

し、愛美にも声を掛けた。一人は話に参加したが、驚いたのはケンイチと相葉の奇妙な関係だった。

「おー一人は付き合ってるんですか？」

メイがケンイチに質問すると、

「そういやそうだな、付き合おつか朋代？」

「別にいいわよ」

冗談か本気か分からぬ。

(そんな事をさらり、と言つてしまえるほど一人の仲がいいのかな?)

「一人のやり取りを、茂野がやつぱりといった風に、

「兄やん、絶対それ言つと思つた」

ニヤけた。クラスでは無愛想なイメージと全然違つ、今、初めて会つた人のようなギャップが愛美の気をさらに惹く。

気付けば、いつでも田^日が茂野を追つていた、探していた。そして氣付いて、悩んだ。

(昔、中学校の頃の恋愛感情と何か違つ、私は茂野の事が好きだから気に掛けているだけだろうか)

愛美は何氣に深呼吸をした。冷えた空間に白いもやが現れ、消える。

愛美はこの気持ちを怖れている。

(これは欲情ではないだろうか)

茂野のことを考えると、淫らな自分が想いの影に存在する。茂野と一つに繋がろうと画策する自分が居る。

(私はそんな女じやない)

否定するが、

(この頭を、胸をよぎつているものは何だろう?)

愛美は苦しんでいた。それは茂野が相葉の事を好きと知つていても、変わらない。

「茂野もこんな感じで姉ちゃんを見るのかな」

独り、つぶやく。茂野を一瞬軽蔑しそうな心が出てきたが、自分

にそんな権利はないと、口を一文字に閉じて講堂に背を向けた。

「メイ」

ホームルームが終わる。クラスの大勢が教室を抜け出るぞわめきの中、愛美は教壇に向かつて声を掛ける。黒板を拭くメイが、振り返った。

「それ終わったら、相談があるんだけど」

メイの右手を指し、

「待ってるからね」

大勢に紛れて教室を去った。メイは、

「返事も待たずに行かないでよ、場所も言わないでさ……」
拗ねたが、

(急な用事でもあるのだろう)

大して気もせずチョーク白墨をこすり取る作業に集中した。

メイは愛美とよく相談し合つが、今の彼女の微妙な雰囲気の違いにメイは気付かなかつた。

日直の仕事も終わり、

「先生」

職員室で日誌を担任に届ける。担任はやや脹れた腹をしゃりしゃりと搔いている最中で、

「おお、ご苦労さん」

メイの存在に慌てながらも、笑つて受け取る。

「お腹痒いんですか?」

メイが聞くと、教師はバツ悪そうに苦笑し、

「なんかあ、蚊に刺されてなあ」

自分の聞き違いかな、メイは、

「蚊ですか?」

妙なことを自分は聞いているな、と顔をしかめた。

「夏やなくとも蚊は出るんやで」

教師に言われ、

(言われてみれば出てきたような……そんな気がする、いやでも……)

メイが思考を巡らせてみると、

「嘘や」

教師は意地悪く、舌を出した。その教員らしからぬ行動にメイは笑い、手で突いた。

「癖や癖。わざわざ聞くなや」

中西も笑う。笑うと、今日の学校生活、最近の学校生活、クラスの授業態度などの話をし、

「ちゃんと勉強するんやぞ」

決まり文句を受けて、職員室を出た。

(愛美が相談といったら、あそこかな)

メイは次の目的地を決めた。

「待つた?」

図書館の裏、高めのフェンスと校舎に挟まれた、窮屈そつなスペースの奥。午前中、愛美が相葉を呼びだした場所である。

「ちょっとね」

案の定、愛美が待つていた。

メイが悪気無く笑い、

「ゴメン」

聞いて愛美は、

「気にしてない」

ぞんざいなやり取りが行われ、沈黙の間が開く。

愛美はじつとフェンスの方を見つめていた。

(言い出しにくいような深刻な問題なのかな)

メイは愛美が言い出すまで待つことにし、その内容を予想してみる。

(茂野のことかな、そうだろうな、他に何かあっても愛美は自分で解決しちゃうし)

今までの相談の経歴が、勝手に決めていた。

(だつたら……)

「もー、そんな深刻な顔して、どうせ茂野のことはなんでしょう?」
明るく言つ。

(「そんな簡単に言わないでよ」

きつと愛美はそう返してくるわ、機嫌悪そつこね)
メイは愛美が自分の予想通り返して来るであらびれ反応を、こいつ、
微笑んで待つた。

ところが、

「愛美?」

愛美の顔を見て、メイの顔色が変わった。

愛美が泣いている。

「どうしたの、何があつたの?」

(違う、何もないの)

言いたいが声にならない。メイが愛美を思つて言つた、さつきの
科白。

(メイは何もない、私の思つてこないよつな……)

さんざん隠つて、呼び出しても、聞き出す前に解つてしまつた。

相葉が最後に言い残した後悔とはこれだつたのだ、

(姉ちゃんはそこまで解つて……)

頬を伝う涙が悔しい、歯ぎしりするが、音を轡き出す位の力は顎
にはない。握つた拳の方に爪が痛々しく、くい込んでいく。

「愛美つて、何か言つてよ」

メイは優しく肩を揺さぶるが、愛美は情けないと思つばかりだつ
た。やつと口から漏れたのは、相葉への非難。

「姉ちゃん……ひどいよ」

(何で、そこまで言つてくれなかつたの?)

唇がハの字に歪んでいくのを感じる。この気持ちをぶつけた相手
は決まつてゐる。けれども、今は、胸を借り、泣く自分と頭をただ
撫でるばかりのメイとの快感。

(今だけ、今だけは)

憎悪を抱きながら、甘えた。

(姉ちゃんは何故？)

こんなに辛い思いをさせてどうしたいの？

私はこれからどうすればいいの？)

愛美は一人、ベットに身体を投げたまま考える。

氣だるい、指一本を動かすのが、今はとんでもなく大変な作業に感じる。

(結局、メイには何も言えなかつた。

でも私は明日から、いつも通りにメイと話せるとは思えない。

茂野にも、姉ちゃんにも、兄ちゃんにも、他のみんなとも話せないだろう)

瞼を閉じる。

(私は、どうすればいい？

誰かのことを考えれば、別の誰かがどうでもよくなる。考えるのを止めれば、全てがいい加減に思えてくる)

「さつきみたいに泣こうかな？」

メイに泣きついた自分を思いだし、独り言。

目尻がじわり、濡れ始めた頃、

(日に一回もなく様な甘つたれじやない)

強く瞑り、こらえた。

(人を好きになるって、こんなにややこしい事だつたかな？

茂野が他の人が好きだから遠慮する。何て臆病なんだろう私は、何て臆病なんだろう茂野は。

何なのだろうあの二人は。

周りの気持ちを考えず、白とも黒ともハッキリしない。

でも、その一人に惹かれたのは誰？

二人のその部分を魅力とさえ感じたのは私寝返りをうち、目を開いて、天井を見た。ギザギザの模様が愛美の視界には揺れていた。

(何かしたい、誰かしたい、茂野としたい、茂野と話したい)
今、とてもなく茂野の声が耳に欲しくて、切ない。

茂野のPHSが鳴る。

「もしもし？ 愛美？」

いつもの茂野の声。胸が落ち着くよいで、ときめくよつな、甘い
感覚を愛美は感じた。

「うん」

涙ぐんだ音で茂野の耳に伝わった。

「どうした？ 何かあつたのか？」

心配そうな茂野。思わず、

(想いを全て吐いて、寄りかかれたら楽なのに)
それは無理だと分かつていながら、考えてしまつ。再び自分が情
けなくなる。

「ううん、やっぱ何でもない」

作った明るい声を茂野にぶつける。

妙な態度の移り変わりに、

「何かあつたんじゃ無いのか？」

「んー？ 心配するかなと思つて」

茂野の疑問を演技で一蹴した。気付かず、

「なんだよ、そんな電話するなよ」

笑つて叱つた。

「あはは、でも気付くんだねー、エライエライ」

「何言つてんだ、用事が無いなら切るだ

「あ、待つて」

不意に止めてしまった。

「何？」

別に言つことはない。

「明日の授業、宿題有つたつけ？」

「無いよ、じや、また明日」

茂野が電話を切る瞬間、

「茂野、私の」と…」

「どうおもつてるの？の声は、

「兄ちゃん、ちょっと待つてよ…」

かき消されて、ツーという音が何度も鳴り響いた。

(兄ちゃんと一緒になんだ。なんか、ムカツクー)

愛美は電話を掛け直す。

「あ、もしもし、姉ちゃん？」

相手は相葉。

「ちょっと聞いてよー。どうして男つでや、いつかの事情も考えずに、率先の楽しことに走るのー？」

一部始終を説明され、相葉は笑う。

「愛美の心中を察して、長く話して欲しいって事？

そりや、アンタ、甘えてるわよ。それに男はね、目に見えるものが優先されやすいのよ」

言い放つ相葉に疑問を持つ。

「え？ でも前、夢とか理想とかそういうのを重視するって言つとつたやん、あれって見えない物でしょ？」

過去の話を持つてこられ、相葉は考えた。その顔は楽しそうである。

「愛美はさあ、男を単純に見過ぎよ。周りは単純単純って言ひナビ、こっちが複雑なように向こううだつて複雑なよ」

(姉ちゃんの意見の中では意外だな)

「男を単純って言う女はね、男の複雑な部分に触れたことがないのよ。そりや、上辺だけで左右される男がいるから、そうなるけど、その逆だつているじゃない？」

「メイとか？」

愛美が例を出す。

「そりそり」

相葉が同意する。メイは以前、いい加減な男に左右された事がある。

一人でメイを笑いながら嘲つた後、相葉が続けた。

「だからさ、基本的に『ジーして男は』じゃないのよ。『ジーして女も』なのよね」

「お互い様つて事?」

愛美的受け取り方に相葉は唸る。

「私その、恋愛でお互い様つて嫌いなのよね。例えばさ、彼氏が浮気しても、聞いてみたら、『お前だってこんな事した』とか言うじやない、どう、ケンカの擧げ句、その常用句よ。なんか嫌じゃない?」

聞かれて愛美は困る。そんなケンカをしたことがない。

(でも、想像してみると嫌だよね。結局それで済んじゃうのは…)

「うん、言われてみれば」

「でしょ? お互い様つて言葉は逃げ口上なのよ」

言い切る相葉。

けれど愛美は、

(どちらに対してなんだろう?)

「女の? 男の?」

「お互いに決まってるじゃない。どっちかにさ、非があつて別れたりしたらさ、『向こううだつてあそこが悪い。だからお互い様だ』って、自分の慰めにも使われるしね。そうなつたら、終わりよ。次の恋愛にもそんなのが出てきて、悪循環を繰り返して、諦めてしまうんだから」

疑問が湧く。

「姉ちゃんはお互い様つて、今、使つたよ?」

「バカね、使い方の違いよ。そんな揚げ足とつてたら、私は一生、其の言葉を使えないじゃないの」

(スゴイな、姉ちゃんは。何で断言しちゃうんだろ?)

「なんでそんなハッキリ分かるの?」

愛美的問いに相葉は柔らかい声で、

「そう言つことをしてきたからよ」

「もしかして兄ちゃん?」

愛美はそれをからかい気分で探つた。

相葉は静かに笑い、

「ケンイチとはそつなる前に別れたわ」「愛美は意外な新事実を聞いてしまつた。

「姉ちゃんと兄ちゃんつて、やっぱり付き合つてたの?」

相葉は一瞬、考え、

「言つて無かつたつけ?」

素朴な疑問を漏らした。

「だつて聞けないじやん、『付き合つてんの?』って聞いたら、兄ちゃんは『付き合おつか?』って言い出すし、姉ちゃんも『別にいいわよ』つて一人とも素で言つちやうだもん! そんなんで前の事とか聞けないよ」

勢い付けて言つ愛美。さらり、

「じゃあさ、じゃあさ、今兄ちゃんが『付き合おつか?』って言つたらどうすんの?」

前からの疑問も出してみた。

「別にいつかな」

相葉は普通に答える。

「うそー! じゃあ、兄ちゃんが言わなかつたら、姉ちゃんから行く?」

「何一人で盛り上^フがつてんのよ」

勝手に興奮しだした愛美に、おかしくてつい、注意する。

「それはないわね。ケンイチはさ、考え方があつさんくさいから、女からの告白は絶対させないし、好きでもない女からされそうになると、どつかに逃げてやり過^{ハシ}すから」

「なんか兄ちゃん、かつこいいね」

愛美が思つた通りを口にすると、

「単なる時代錯誤のバカよ」

相葉がさらり、一瞥する。

愛美は言葉を失つが、

(やつぱりこの二人はすゞこ)
頻りに感心していた。

通行中の道には桜のつぼみが見えていた。

登校中に集まつた人間は1ダース、三つぐらいのグループに分かれ、狭そうに歩道を歩いてくる。

「もうじき三年生かー」

茂野が呟いた。その周囲には相葉、愛美、メイ、迫下、梅田、富山。

「そーいや、そろそろ卒業だよなー」

茂野の呟きに、富山が相葉へつなげた。

「あのバカは留年しようかなとか行つてたわよ」

「兄ちゃんが?」

メイが笑う。セレベ

「そしたら兄ちゃんね、一緒に俺と族（暴走族）やって、一花咲かせるんだぜ」

迫下がしゃしゃり出るが、いつものよつて話題がついていけないので無視され、

「あー駄目駄目。留年しても、俺が追い出すから」

梅田が得意気に断言する。

「梅田、まだ根に持つてんの?」

茂野は以前、梅田がケンイチからさんざん田舎者呼ばわりされたことを指摘する。

「違うつて、兄やんこの前、迫下と俺、呼び間違えたんだって」

言い返す。が、

「何だよ、結局根に持つてんじゃん」

富山が笑う。周りもニヤついている。

「みんな何だよ、俺が逆恨みしてゐるつて言いたいのか? ああ、そうですよ。逆恨みですよ、へ!」

こじける梅田だが、それが滑稽なので、結局みんなに笑われてしまう。

「みんな、梅田いじめちゃダメだよ」

いきなり藤田が割って入ってきた。梅田とは同じクラスの親しい間柄である。

彼はおっとりした口調で、非道いことを言つ。

「優しい田で見てやうつよ、こいつはただの田舎者なんだから」
どつと、弾けるように笑い声が起る。

「おまえ、ちやんとフォローしろよー。」

梅田が藤田につっかかるが、

「え？ だつてフォローする義理無いモノ」

さらりと言つてのける藤田。藤田の口の悪さはケンイチと互角といわれている。

それを受けた梅田は先頭に立つて、周囲の人間に向けて、

「お前ら、みんなサイアクだ！」

走つて去つてしまつた。

「待てよ梅田！」

数人が追いかけて、捕まえる。

そして

「う・め・だ・う・め・だ……！」

何故か梅田コールが湧き上がり、

「何で胴上げしてんの？」

相葉や他一同を呆れさせていた。

勝手に盛り上がつてゐる梅田連中を脇に、雑談しながら通り過ぎる
相葉達の中で、メイが愛美に気付く、

「愛美、どうしたの？」

愛美は先程から何も喋つてはいない。周囲もそれに察し、体調でも悪いのかと不安げな顔で注目した。

「つうん、何でもないの」

(姉ちゃん達がいなくなつた私たちは、その後、どうなるのかな?)

言葉には出せない、ただ一つの疑問が、茂野の進級を示す口振りで起こつたそれが、怖ろしい。

(姉ちゃんがない。それは学校で、頼りにする人がいなくなると「うう」と。きっと、茂野も同じ。兄ちゃんがいなくなることを茂野はどう思つているんだろう?)

愛美はこれから先、自分がどうしていけばいいのかを悩む。

メイは知らず、

「姉ちゃんは卒業したらどうするの?..」

相葉の将来を探ろうとする。

(何言つてんの? いなくなっちゃうんだよー。どうしてそういうバカな事が聞けるの?)

愛美にとつては脳天気な質問に受け取れた。しかし、聞きたいことでもあつたので、何も言わず耳を傾けた。

「就職よ。『冠婚葬祭の会社』に」

相葉はとつぐに進路を決めていた。

「へー、姉ちゃん進学しないんだ? 頭いいのに」

メイにとつてその答えは以外で、

「頭よけりや進学しなきやいけないって道理もないわよ」
相葉にとつては当然の行動だった。

富山は苦い顔で、言つ。

「何だよ、決まってねえの俺だけかよ」

「アンタ、卒業まで後2ヶ月つてのに何やつてんのよ」

富山のもたつきに相葉が非難を投げる。

「んな事言つたつて、受ける会社受ける会社落つこつまうんだもん、しょーがねーベよ」

すねる富山を、

「そいや、兄ちゃん今日が大学受験だよね」

茂野が思い出し、口にする。そこへ

「え?」

波紋が起きる。ケンイチが朝からいなのは日常茶飯事、

「社長出勤の男」

と噂されるほどなので、この場に存在しないことに違和感はないが、まさか受験とは。

「兄ちゃん、進学するの？」

「嘘、聞いてないよ？」

と、メイと戻ってきた梅田。ケンイチから何も聞かされていないことを物語る。

茂野も、みんなが知っているとばかり思っていたので、この反応に戸惑う。さらに、「どこの大学？」

相葉が言つと、

「え？」

さらに周りが驚く。

「姉ちゃんも知らなかつたの？」

茂野が代表したように言つた。

「進学するようなことは言つてたけど、ビニに行くかは聞いてないわよ」

その答えは不機嫌そうに、愛美は聞こえた。

「誰にも行き先言わんと、なーにやつてんのケンイチは？」

眼を細める富山、普段が細いので、閉じてるようにも見える。

「富山、何寝てるの？」

「やつかまし！」

周りの感想は賛否両論でざわつくが、茂野はとりあえず話を進めた。

「河村大学に行くつて言つてたよ」

「聞かないわね…」

相葉が呟く。少し、考えて。

「東京のバカ大学だつて」

茂野はここがどんな大学かは知らないが、
(俺の行くような大学だからバカ大学だ)

ケンイチに説明を受けた時のこの答えをかいづまんで伝えた。

そこにいた皆は茂野の表現を、ケンイチがそう語ったのであると、何となく察し、

「東京かー」

「いっつちに戻つてくるときにおみやげ頼もうかな?」

地名の方だけに話題を持つていった。日々に東京への感想や流行の店を話していると、愛美が、

「でも都心に行くつて兄ちゃんらしいよね」

皆もそつ思つていいあるひう事を言つた。

だが、

「何で?」

あらう事か、茂野がその事に突つ込んできた。今までの会話の中、最も意外な声で。

愛美は戸惑つ。

(何でだらう? 私は今まで兄ちゃんを見て、話してそつ思つたから言つたんだけど。茂野に返す答えはこれじゃない、多分、……) 答えは出た。言えば、何かが起じるそんな気がしてならないが、愛美は覚悟を決める。

「アンタはいっつもくつついでるから、そういうアヒトが見えないのよ」

(言つた、言つてしまつた。私にとつて茂野への、ある意味最大の助言、ある意味最大の非難。受け取り方次第で、茂野は私を好きになることはないだらう、私に向かつて『愛してる』とは十年経つても言わないかもしけれない)

愛美は茂野がどう返すかが、そのほんの少しの間に様々なことを考へる。

(茂野の田がうろたえてる……まさか、朝からこんな事を言われるとは思わなかつたでしょ? 私もまさか、朝からこんな事を言つことになるとは思わなかつた。でもね、さつき私思つてたの、私に姉ちゃんがいなくなるように、茂野も兄ちゃんがいなくなるのよ?)

それがどういうことが、私の今の言葉にあなたが返すこととで分かるような気がするの）

茂野は閉口し、ちょっとだけ、上を見る。考えるときよく出る彼のクセ。愛美にはとてもスローに見えた。

（お願い、私への非難でもいい。何か言ってー）

茂野の口が開く。

「そつか」

愛美的、その瞬間までの、時間が普段に戻る。

周りの歩みは早く、愛美が早歩きでなければ追いつかない、いつものスピード速度。

愛美的思考が一瞬止まり、足取りも止まり、皆が遠く離れていく。茂野も。

田に映るその場景が頭に伝わる。置いて行かれる自分に、慌てて、思考する以前に、

（待つて）

無意識に急いでとするが、自分の意志と身体と感情はバラバラで、上半身だけが前に出ただけだった。

（そつか…って、『そつか』って何？『そつか』で済ますの？兄ちゃんどころか、あなたの好きな姉ちゃんもいなくなるのよ？『そつか』で済むの？ 分からないわ、茂野ー そうやって済ませられる、あなたが！）

愛美はゆっくりと、

「…茂野はこの2年間を幻とでも思つて居るの？」

声は小さく、愛美は皆の最後尾で、誰一人としてその問はずはない。

メイが、いつの間にかに愛美が遅れて居ることだけに気付き、声を掛けようとするが、

「ほつきー」

相葉に制され、雑談に戻った。

足の遅い愛美が校舎に入ったのは、

(鐘が鳴る。さよならの時間を一つ一つ告げるよつ。先輩達との2年間は、時間は、なんだつたのだろう…)

始業のチャイムが鳴り終わる頃だった。

愛美が下駄箱を開くと、中には端の乱暴にちぎれたルーズリーフが一枚。

殴り書きのその字を、読む。

過去は速く

濁流ばかりを見つめ

現在は早く

清流ばかりを探し

未来はゆっくりと

何の色を施すこともなく流れている

誰が送ったのか、名前は書いていない。

(姉ちゃんかな?)

愛美の記憶では、この字と相葉のそれとは当てはまらない。だが、(誰だろつ。人が落ち込んでるのを見計らつてのことだろつか、キザな事をするわね)

犯人がどうこうよりも、こんな行為をしてくる人間が自分の周りにいることが笑えてくる。

「バカな奴がいたのね」

思わず微笑んで独り言。一人笑つていると、

「愛美さん、何しようと?」

ひょいっと、梅田が下駄箱の端から顔を出した。

(待つてくれたんだ)

急ぎ履き替え、廊下に飛び出る。

梅田に礼を言おうとすれば、

「行くよ!」

そんな間も無く、手を引っ張られた。驚きながらも、

「ちょっと、そんなに引っ張らなくても自分で行くわよ！」

梅田に文句を付けるが、

「あー、つるさいうるさい」

彼はお構いなしに走っていく。

（強引な人ねえ……）

思いながら、愛美も足を速めていくのだった。

外伝1・2の読破ありがとうございます。

この二つの話のコンセプト、ご存知でしょうか。

「シリエット兄さん」です。

うまく隠れてるといいのですが。

相葉洋子 三年（前書き）

帰宅部シリーズ第一弾。三部作最終話。

夢が終わる。私は今の現実に向けて、目覚め始めた。
「なんでこんな夢を」

卒業式

朝、ホームルームが始まる前。

「ケンイチ」

机に伏せて眠る男をたたき起します。

「ツテーなあ……」

ケンイチは寝ぼけ眼で、起きあがる。

「アンタ、卒業式つて言つのに緊張感無いわねー。いつもと変わらないじゃないの」

「何を卒業するんだよ……」

「高校よ」

ケンイチは目を丸くする。

「え？ 今日だっけ卒業式ー！？」

「おいおい……」

「おじおいー まーだ寝呆けてんのかよ？」

同じクラスの富山が笑う。

「いや……卒業式の練習はよくやつたが、まさか今日だつたとは」

「本気で知らなかつたな……」

「まあ、アンタらしくていいけどね」

「どういう意味だよ……！」

言われた本人が笑っている。

「そういう意味さ」

「うわ、富山までそういうこと言つて……オレはよつぱり抜けてるよ

うに見えてたんだな」

ケンイチはしばし考えて、

「よし、これから学校生活はしつかりやつてこい！」

「だから卒業式だつて！」

「ぱんつと、馬鹿なことを言つので、富山と三人で突つ込む。は？……三人？……ぱん？」

「てめ……！」

ケンイチが振り返り、ほぼ同時に私も隣に視線を移す。

「渡辺？」

別クラスの渡辺がいつの間にか来ていた。身長は高い方、人を食つた様な顔と何かズレてる性格が特徴で、ケンイチとはよく喧嘩される所をよく見る。

「おう、お早う」

爽やかに笑つて挨拶する。いや、お早うじやなくてその手に持つた……

「お早うじやねーよ、どつから出したそのハリセン？」

ケンイチが叩かれた頭をさすりながら問う。

「鞄の中に忍ばせて」

言つて渡辺は鞄にそのハリセンをしまい込む。

「んなモン持つてくるなよ！」

「お前だつて、携帯灰皿とか持つてんじやねーか」
平然と返す渡辺。

「それは違うんじや……？」

私が首を傾げると、

「携帯灰皿ぐらい誰だつて持つてるだろ！」

ケンイチが渡辺に反論する。

「それも違うんじや……？」

「モー、突つ込むのも面倒臭い。

「だから、携帯ハリセンだつていいじゃん。便利だよ？
いつだつてツツコミ入れられるし」

「だーかーらー！」

ケンイチと渡辺が意味のない論議を始まる。私はその議論に参加するのもウザいので、

「価値観が違うのかな？　単にバカなのかな？」

「いやー、両方だろ」

富山と一人で渡辺の思考を推理していた。

「同じクラスの連中もいつかはあんな感じになるの？」

「んー、そうだろうなあ、アイツと同じクラスだし……」

富山は重々しく頷き、私は反論する。

「それじゃ、ウチのグループの大半がそういう事になるんだけど……」

富山は考える間を置いて、

「あ……」

一言。悲痛な顔で言い合つ一人を見つめるのだった。

その頃、ケンイチと渡辺は、『ハリセンのツッコミ方とボケの反応の仕方。その角度と重さ』について、本を出しかねない勢いでディスカッションしていた。

なんだかなあ……。

そんな緊迫感のない中、卒業式が始まった。

「三年A組、川上明」

誰かが名前を呼ばれ、

「はい」

返事をして壇上に登つていいく。ステージの真ん中で待つ校長に渡された卒業証書は危険物のように扱われ、その誰かさんは自分の席に戻っていく。

「川添啓一」

「はい」

「水野　」

そんなやり取りが行われ続け、

「三年C組、相葉洋子」

私の番が来た。

「はい」

返事する私がステージに向かっていく。普通に歩いているつもりだが、何だか地に足が着いてないみたいで、思ったより緊張している。

ステージに上がった。卒業証書を持って迎え撃つ校長まで、あと何歩か。

「三年C組、相葉洋子。以下同文」

校長はえつらそうに紙切れ一枚私に向ける。

私はそれを、確かに左手からだよね？

自分に問い合わせて、深くお辞儀をしながら受け取った。

「おめでとう」

校長は建前上だか何なんだか、祝いの一言。

私はそれを、

(……めでたくもなんともない)

「ありがとうございます」

心の声と裏腹に礼を述べる。

ありがたいその紙を持って、振り返る。目に入ってきた風景、体育馆は卒業する三年生と、学校の決まりで見送る一年生がきれいな列で敷き詰められて、その後ろに保護者が並んでいる。

圧巻。

もう明日からここには居ない。

そう思つてしまふと、なんか、泣けて来ちゃうなあ。

私は自分の席に戻った。

卒業式が終わり、皆は講堂に集まつた。

放課後（私がこの高校で、まだそう呼んでいいのか分からぬが）にこうやって集まるのも最後。でも、誰もその事を言わない。

「相葉、相葉」

富山が呼ぶ。私は卒業証書の入った筒に巻いてあるリボンを結び直す（結び方が気に入らないかったので）手を止めた。

「あれあれ

彼の指す方向を見る。誰かが少し離れた所で胡座をかいている。よく見れば、

「……ケンイチ？」

ケンイチが真っ赤になつて前を一点に見ている。時折歯を食いしばり、震えながら。必死に泣くのを耐えている。その様に、「ふつ」

今まで見たことのないケンイチの可愛らしさが可笑しく、吹き出してしまった。

「面白いやろ？」

聞く富山は一矢ついて、ケンイチがいつ泣き出すのか期待している表情だ。

「うん、見たことなくて意外。でも、ケンイチらしいね」

「そだな……」

富山。表情は普通だけど、目が潤んでる。男つてこいつこう事に涙モロイわねえ……

ちょっとと優越感の女の私 でも、思い出すことなら山程あるよね 今もケンイチを笑つたけど、昔の私では笑えなかつただろうな。あの時そのままだつたら、また怒つてたかどうだか。

ん？

ふと見れば、ケンイチの後ろの方に、メイ・梅田・迫下と一年生の男連中。帰宅部でもよく集まる主翼のメンバーが何やらこそそしている。ケンイチに気付かれないうように柱の影に隠れ、何かを期待した顔で彼の様子を窺っている。

「アイツら何やってんの？」

富山に聞くと、

「ん？ ああ、あれ？ ケンイチが泣くか泣かないかで賭けてんだ

つて

呆れた風に言つ。確かに呆れたことだが……。よく見れば、ケンイチが震える度に全員で身を乗り出し、

「ああー……！」

メイと迫下、そして梅田が悔しそうな溜息を吐き、「よし！ よしつ、よし！」

梅田が嬉しそうなガツツポーズを取つてゐる。

……確かに呆れるわね。

「梅田が泣かない方に賭けてんの……？」

ウンザリしながら聞く。富山は無言で頷き、表情も私と似たようなモノだ。

暇。というワケではないが、なんとなくそつなので、その五人の動きを見てみる。すると、

『あ』

私と富山が同時に口走つた。ケンイチが連中に気付いたのである。

「あ、近づいてつた」

私の冷めた状況説明に、

「目が怖いね」

富山も続いた。

「逃げた」

「ビビッてるね」

人の感情にお金を賭けていた後輩たちは、その罰を本人から受けるような まさしく自業自得。

「ケンイチ走つた」

「キレイてるね」

後輩は散り散りになつて逃げる。ケンイチは誰かを追いかけては誰かへと後輩たちに翻弄されていたが、そのうち 太つてゐるのが不幸だった一人。

「迫下捕まつちゃつた」

「みんな助けるつもりないみたいだね」

追いかけられていた連中は言葉通り、ケンイチから一番離れた柱に集まつて、ケンイチが捕まえた迫下をどうするのか観察していた。

……非道いなあ……。

「まー、迫下だからねー……」「

富山はしみじみと納得している。それもそうだ。問題はケンイチがこれからどうするかだ。迫下の顔に何かしてみたいたけど……？

「ケンイチは迫下の顔に何してんの？」

富山は田が良く、見えているようで、

「落書き。おでこに何かとか書いてんじゃないのかな？」

「……その内、田にバー죑ードとか書き出すわよ」

私がそう進言すると、富山は笑う。

「そんな危ないことまでしないだろー？」

突然、迫下が叫ぶ。

「冗貴、マジで『メン！』それだけは勘弁して！」

「つるせえ！ とつとと田エ出せやコラア！」

ケンイチの声を聴いて富山は、笑った顔のままで止まつた。私は予想通りだつたので満足気な顔をする。しかし 最初、「冗談と思っていたケンイチは本気で迫下の眼にバー�າードを書こうとしていたのが分かり、そこに居る者総勢でケンイチのマジックを取り上げた。（油性だつたことに更に驚いた）

その後、ケンイチは自分をダシに賭け事をした連中に昼食として、ホツとドックを騎つた、みんながそれを受け取る際、

「マスターでかけてやるよ」

サービス心たっぷりの笑顔でホツとドック一本につきマスターで一本を使い切り、それを見て顔の青ざめた後輩に与えた。四人には一つの意味で『辛い』卒業式になつてしまつたのは言つまでもない。その間、卒業式の片づけ係に行つていたEとCが私たちと合流した。二人は私と田があつた途端、

「姉ちゃん行つちゃ嫌だー！」

二人揃つて泣き付いてきた。愛美は覚悟してたけど、メイまで泣いたのは意外で、

「バカッ……！ そんな泣かなくても、いつだつて会えるでしょ……！ ……こんな事で泣かないでよ……」

つい今まで涙を流し、三人で抱き合つた。（後に思い返して一番恥ずかしかった出来事だった……）

でも、女の子が三人泣いてる傍で男四人が目を真つ赤にして黄色いホットドックを食べて、それをにこにこしながら見てる人がいて、凄い光景だつただろうな……。

泣き止んだ後は帰宅部全員でカラオケ行つたり、ゲーセンに行つたり、卒業式の後はこんな感じでいつも通りにはしゃいだ。一つ違うと言えば、愛美と梅田がやたらくつついでいた気がするが……ひょつとして……？

愛美は茂野じゃなかつたつけ……？

遊び回つて終電間際の時間となつただけに、さり気なく急いで向かう中、

「ねえケンイチ」

「何？」

隣にいた彼へ、やつぱり並んで歩いてる一人組を指す。

ケンイチはニヤけて、

「裏切られた？」

「……言つと思つた。

「そんなんじやないわよ、バカ」

どういう事なのか知りたかつただけよ……。

「オレも分かんねーよ」

私の心を読んだかのように咳くケンイチ。

「ただ、そういう事になつてんだつたら、勘織ららずに受け入れりやいいんじやないか？」

……何かむかつく。でも、ここで怒つても大人氣ないし、

「そうね、野暮だしね」

表面上、ケンイチに賛同する。

「そりそり」

彼も相槌を打ち

.....。

私はケンイチの頭を鞆で殴つた。

「痛つ？ 何すんだよ？」

「前から言おうと思つたけど……アンタ、ムカツクのよ。眞面目な話をすると、いつも私が小さく見えるから嫌になるわ。何様のつもりよ？」

私が睨むとケンイチは頭をさすつたまま、

「いきなり何様って言われてもなあ……。まあ、自分が小さいと気付くことは良いことだと思つぞ」

口調と表情は苦い。けれど、それがふざけた演技であることが判る。

ダメだ。コイツは一生はぐらかす……。でも、それはそれで嫌だなあ……。いつかはどんな問い合わせもいいから、ちゃんと答えて貰わないと。

取り敢えず今は、愛美と梅田 二人が予想通りだと良いなと思うだけで、ケンイチについては今度にしよう。
そう、必ずいつか

駅に着いた。私達と駅員以外は見あたらないので、嫌な予感がしたが、最終の一つ前の電車に間に合つていたのが分かり、取り越し苦労で終わつた。

ホームの屋根に吊されたライトは白く鋭く、ベンチに座る私達はとても孤独な場所にいる氣がした。
みんなの顔を見る。

殆どが下を向いている。これでもう本当にお別れ。少なくとも明日からはこの制服で会つことはない。
けれど、別れる間際さえ、

「それなら」

「じゅあね」

「ぱいぱー」

「またな」

いつも通りのことしか言わなかつた。最後でも誰もその事を口にしない。けれど

いつか誰かが後ろを振り返つた時、後悔じみて言つだらう。それが何時で誰かは分からぬが。

相葉洋子 二年（後書き）

続きます。

相葉洋子 卒業後（前書き）

卒業式を終えて、相葉は時間を持て余していた。

べりやみが影を作ることはない。光のよう区別されることは無い。水のように、風のように、沸ることは無い。

この世の中で、もっとも差別しないものかもしれない。

外の景色を見ていると、そんなことを考えた。そんな心境に至る、特たる理由はないのだが、暇だから余計なことを考えるのだらう。

卒業式を終えて、丸一日経つ。

就職先に出向くのもまだ一週間も先のことだ、この長い休みを楽しもうと思ったが、退屈が返つて窮屈に感じる自分の性分をすっかり忘れていた。

誰かに連絡をとつて、遊ぶのも悪くないが、呼び出す相手も思いつかない。今までの自分が常に受身だったからだ。

自分が何もしなくとも、かまつてもらっていた。

可愛がっていた後輩も自分から、遊びに来ていた。

ケンイチにも自分から動くことは無かつた。

臆病な自分、卑怯な自分。

誰が来ても平静でいられると、自負していた。でも、最近では違つてきてている。

自分から誰かに話しかけることを放棄しているから。

誰かが話しかけるのを待つていてるから。

だから、強によつに思えるだけなのだと。

暇といつもは恐ろしい。普段考えもしないことを考えさせられる。しかも、やたらネガティブなことばかり。

ベッドに寝転んで、ケータイをいじつてみる。

着信履歴は、昨夜に愛美からかかつてきた一件のみ。その内容は曲名から歌手を当てるところなものだった。CDを買おうとして忘れてしまったらしい。曲名だけでも見つけられるとは思つただが。

「ケンイチのヤツ……」

虚空に漏らした言葉は、恨み言だった。今、なぜか無性に彼に腹が立つ。アイツも暇なはずなのに。

「データぐらい付き合ってやるのに」

今までの自己嫌悪も忘れて、彼からの連絡を待っていた。

今日連絡が無かったら、知らないから。

他の誰かと遊ぶ気にもなれなかつたが、だから「知らない」といつたところで何も思いつかないが、心中で舌打ちする。

「あ、ケンイチ？」

一時間経つた頃だらうか、結局、私は電話していた。我慢できなわけじゃない。お互い、暇なはずなのに向こうが連絡もよこさない訳が知りたくなつたのだ。

「どうした？」

電話の向こうはすぐ騒がしい。しかも、聞きなれた声が何やら喚いている。

「うるさいね」

「ああ、茂野と梅田が暴れてる」

何か、自分の中で割れる音がした。

「どうしたの？」

「いや、梅田が愛美に告白したらしいんだけど、茂野を引き合いでして断つたらしいんだよ。そんでな、オレがそれを知らなくて、一人をカラオケに誘つちゃつたワケ」

曖昧な相槌を返す。

「で、今、何で付き合つてやらないのかつて、梅田のひがみのような、愛美に対するフオローのよつな。まあ、梅田はイイヤツだなとオレは感心してるんだけど」

「茂野は？」

鼻で笑うような息遣いが耳に入る。

「そりゃ、お前が言うのは野暮だろ。梅田にオレの好きな人が誰か

知ってるだろってさ」

随分前から平行線のままで、ついには怒鳴り合いに発展したらし
い。

「一応、釘刺したから殴り合いまでは行かないと思つがな
い。」「楽しそうね」

「笑い事じやないよ、こつちは遊ぶつもりだったのに」

溜め息混じりの声。今、苦労してるのは、本当に分かる。

「でも、ケンイチはアクシデントが楽しいんでしょう？ 刺されたと
きも、茂野を殴った時も」

「トラブルに巻き込まれたり、自分から首突っ込んだりはよくある
な。そういう自分が好きではある。楽しんでるわけじゃないけどな
分かってる。分かってるんだけど」

「じゃあ、大好きな自分のために、今回も頑張つたら？」

切つた。

何言つてるの私。ワケ分かんない。

いや、でも何を男同士でカラオケなんか行つてるのよ。

そりや、何か腹立つじやない。

何よ。私だつて暇しるんだから、誘つたつていいじやない。そう
すれば、こんな怒ることにもならない。
その辺に何で、気付かないの。

何時までも私をわかってくれない。

「何で、別れた相手にここまで腹が立つのよ」
ケークタイを思いつきり投げつけた。枕が軽く浮いた。

「愛美、今から暇？ うん、メイも誘つて。いいよ、私がオゴる
鳴りっぱなしのケークタイなんか、知らないから。

相葉洋子 卒業後（後書き）

次回、最終話です。

相葉洋子（前書き）

相葉洋子 卒業後 後編。最終話。

「姉ちゃん、私たちここで帰るね」

次の角を曲がれば、私の家に着く。確かに、家に泊まるという話

はしていないが、カラオケボックスから家と駅では反対方向だ。

「帰るって、電車ないわよ?」

愛美的発言は無茶だ。何を思つて言ったのか。

視線を追つてみる。

家の前にケンイチが立つていた。

私は言った。

「じゃあ、愛美的家に行こうか?」

待てカラ。自分でも思つたし、一人からも言われた。

「どおりで、今日は変だなつて思つたんですよ」

「姉ちゃん、それはずるい」

メイと愛美、日々に責め立てる。

「違うわよ。別に今夜だつて会つ約束してたわけじゃないし」

言つと、愛美はわざとらしい溜め息を吐き、メイは頭を小さく振つた。

そんなあからさまに、呆れなくもいいのに。

「とにかく、私たちは自力で帰る。心配しなくても大丈夫」

「姉さんにカラオケおごつてもらつたから、愛美的家までなら一人でタクシー代出せるし」

それじゃあ。

二人は止める間も『えず、去つてしまつた。

一人には後で、謝んなきやな。

私は深呼吸して、ケンイチの方へ向かつた。

「何でいるのよ」

彼は戸惑いながら、

「来なきやいけないって思つたから」

不器用にはにかんて見せた。

彼の前を通り過ぎ、家の門を開けた。

「入つたら？ 寒いでしょ」

「いいのか？」

「いいわよ」

家は普段から誰もいない。母はとうの昔に死んでたし、父は仕事でろくに帰つてきた試しがない。姉すら、男のとこに入り浸つている。

私が男を入れたところで、咎められる言われも無ければ、咎める人すらないない。

昔、愛美に羨ましがられたつけ。

ケンイチを、男の人を、初めて家に入れた。

変に胸が高鳴る。

ケンイチを居間に通すと、すぐにコーヒーを出した。ケンイチは猫舌で、時間をかけて飲んでいた。私は飲み終えるまで待つた。

「コーヒーを半ばまで飲むと、

「ごめんな」

優しい声が痛かつた。謝るのは彼じゃない。

「別に」

どうして、素直になれないのだろう。謝つてしまつたほうが楽なのに。

「別に謝る理由なんかないでしょ」

「あるよ」

聞きたくて、目を逸らした。

「ずっと、待たせてた」

待つてた。本当に待つてた。言われて気付いた。

「今更？」

せせら笑つた。正直言つと、涙が出かけた。

「今まで気付かなかつた」

違うな、ケンイチは訂正した。

「確信が無かつた。だから、気付かないフリをしてた」

二人の離れた時間が長すぎて、私の中ではもう終わつたものと、ケンイチは思つていた。でも、心のどこかで待つてゐるんじやないか。でも、それは自分のエゴじやないのか。私に確かめて、自分が傷つく結果になることを恐れた。彼はそう説明した。

「卑怯だとは思つた。そして、相葉が何も聞いてないのに、自分の確信だけで今、話してることもズルいと思つ」

だから、すまない。

「するいよ」

「うん」

「なんで、いつつも大人ぶるの」

「ごめん」

「なんで、アンタだけ大人なのよ」

「そんなことないよ」

「私だけ、子供みたいじゃない」

抱き寄せられていた。

私はそのまま、ケンイチの胸に甘えていた。不思議と居心地がよかつた。

「また付き合つかどうか、オレにもよく分からない」
優しく頭を撫でる手が、心地よかつた。

「このままいい氣がする。そう思つ反面、より深く付き合いたい

気持ちもある

「……したいってこと？」

ケンイチは少し慌てた様子だったが、少し、考えて、「そうかもしない」

耳元で囁いた。確信犯だ。狙つて囁いてきた。その手馴れた感じが、安心するけどムカつく。

「相葉の部屋に行く？」

ケンイチの問いかけに、私は無言で頷いた。ケンイチは面白がるよう、微笑んでいた。

「何？」

「いや、相葉が黙つて頷くの初めて見た」

可愛いと付け加えられ、可愛くないと怒つて見せた。

二人で笑つて、ケンイチがもう一度尋ねる。

私はまた、無言で頷いた。（意識したから、若干ぎこちない気がする）

部屋に向かう途中、無言だった。といつより、私はすでに頭の中が真っ白になりかけて、階段を登る足取りも覚束無いほど、緊張していた。

自分の部屋のドアが、やたら耳に響く。ケンイチは気になつてないだろうか。

ああ、しまった。お風呂に入りたい。
今更言つても、しょうがないのかな。
言つていいいのか、分からない。

下着はこの前買つたばかりの物でよかつた。
お風呂が気になる。電灯消さなきゃ。

あいば。

……「一ヒー臭い。さつき飲んだから、当たり前か。でも苦くはない。

随分、前に愛美とふざけてしたことがあるけど、唇や舌だけでも男の人って力強いんだ。

頭を撫でる手、背中をさする手。耳にかかる吐息。優しくて、くすぐつたい。

!

首筋を何かが這う。思わず退いてしまった。それが分かつているかのように、追い掛けてくる。

首をかしげたまま、硬直してしまつ。

止まった。

ケンイチの動きが止まつた。ケンイチの時間だけ止まつたように。私は自分が嫌がつたのが原因だと思った。

「ごめん、違うの」

ケンイチは止まつたまだつた。目には、彼自身の手が映つている。私の胸を触ろうとする寸前の。

「ケンイチ？」

ケンイチはいつたん目をつぶり、力なく笑つて、

「ごめん」

私を抱きしめた。何がごめん？

「寝ようか？一緒に寝てもいい？」

いや、もともとそのつもりだったんだけど。

違う、このニュアンスは本当にただ、一緒に寝るだけだ。どうなつてるのか、分からない。

ケンイチは早々に、人のベッドに潜り込んでしまつた。私も追いかけるように、入つていく。

私、何か悪いことしたのかな。

「私のせい？」

「いや、違うよ」

「本当に？ 正直に言つて、怒らないから」

「いや、本当に相葉のせいじゃない」

木造の天井。電気は消えていて、埃っぽい木目は見えない。窓を見ても暗く、近くの公園で咲いていたはずの桜は不気味な影になつており、私は目を逸らしていた。敷かれた布団は暖かく、切ない。私一人ではないから。

ふと顔を横に向けると、隣の男はまた布団からはみ出でている。寝相ではない、起きているのは分かつている。

避けているのだ 私を。

何で……？

「ねえ……ケンイチ」

私は横にいる彼の名を呼んだ。

続けて、聞いた。

訴えに近かつたかもしれない。

「どうして何もしないの？ 私が汚いか？」

「違う。そんな事は、言わないでくれ」

搾り出したような声が返ってきた。

「違うのなら、何故？ いいじゃないの、抱けば」

だつて、私は好きよ。このまま、訳のわからないまま、夜を過ごすのは嫌。

「何故拒むの？」

「触れない」

「……おっぱい小っちゃいから？」

吹き出しながらも、答える。

「ぜんぜん関係ない」

一瞬、緩和した空気はまた張り詰めた。

「どうして触れないの？」

遠くから、電車が通る音が聞こえる。こんな時間に走るのだから、貨物列車か寝台列車だろう。静かな空気に滑車の音がよく響いた。聞こえなくなるのを待つて、会話を戻した。

「黙らないでよ」

ケンイチは答えない。

「初めてってワケじゃないんでしょ？ 私知ってるんだから」「むしろ初めでは私なんだし。その私がなんで、ここまで氣を使うことになってるのか。

「せめて……答えてよ」

もう、答えてもらえないのか。諦め始めた時、

「大好きなんだ」

……え？

「聞こえないわ」

聞き違いと思った。それはできない理由にならないから。

「好き過ぎて、触れないんだ」

ケンイチが適当な嘘をついたようではなかった。むしろ、適当でもなかつた。さらに厄介なことに、その気持ちが私には分かってしまった。

そんなの、そんなの今更になつて……。

「じゃあ、なんでしたいなんて言つのよ？」

「ごめん」

オレもこうなるまで知らなかつた。言われなくても、続きを分かつた。

ケンイチは震えていた。

私は泣けなかつた。

ただ哀れで、泣くよりも胸が痛かつた。ケンイチの背中を抱いて、

眠つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7325a/>

桜坂高校帰宅部

2010年10月8日11時32分発行